

324-22F

工6P73

直心淨國禪師御講述

普勸坐禪儀提耳錄

東京 鴻盟社發行

44. 8. 18

○田通權先生性體曰四妙用
無礙曰通乃一切眾生皆有
之心源緒任其升所證之聖
境也。全體現。此亦云空
念不生至體現。此亦云
一念生時至體現。此亦云
領受金空位。即用最
五位序。至全體。即用最
花開。全用。即用最
不盡。

○薛玄老云。國而時。則曰。世。是
淨。其源。任其。昇。所。證。之。聖
境。也。全體。現。此。亦。云。空
念。不。生。至。體。現。此。亦。云
一。念。生。時。至。體。現。此。亦。云
領。受。金。空。位。即。用。最
五。位。序。至。全。體。即。用。最
花。開。全。用。即。用。最

○信心錄云。空。性。體。有。差。天。地。懸
隔。欲。得。現。前。美。在。須。通
達。道。相。爭。是。為。心。病。二。見。本
往。懷。勿。違。身。然。自。是。非。妙。然
失。心。
○陸州。不。空。云。你。等。諸。人。還。得
覺。頭。也。未。若。未。得。入。頭。
須。得。箇。入。頭。若。得。箇。入
頭。不。得。古。弄。負。先。僧。

○宏智頌云。空。性。體。有。差。天。地。懸
隔。欲。得。現。前。美。在。須。通
達。道。相。爭。是。為。心。病。二。見。本
往。懷。勿。違。身。然。自。是。非。妙。然
失。心。
○陸州。不。空。云。你。等。諸。人。還。得
覺。頭。也。未。若。未。得。入。頭。
須。得。箇。入。頭。若。得。箇。入
頭。不。得。古。弄。負。先。僧。

○聖賢云。空。性。體。有。差。天。地。懸
隔。欲。得。現。前。美。在。須。通
達。道。相。爭。是。為。心。病。二。見。本
往。懷。勿。違。身。然。自。是。非。妙。然
失。心。
○陸州。不。空。云。你。等。諸。人。還。得
覺。頭。也。未。若。未。得。入。頭。
須。得。箇。入。頭。若。得。箇。入
頭。不。得。古。弄。負。先。僧。

原夫道本圓通。爭假

修證宗乘。自在何

費功夫。况乎全體

迴出塵埃。方孰信拂

拭之手。段大都不離

當處兮。豈用修行之

脚頭者。子然無

有差天地懸隔。違順

絕起紛然。失心直饒

誇會豈悟兮。獲瞥地

之智通得道。明心兮

與爭衡。天之志氣。雖道

○法上曰云

○正宗上時

○人本體云

○薛玄老云

○道全體云

○法上云

○法上云

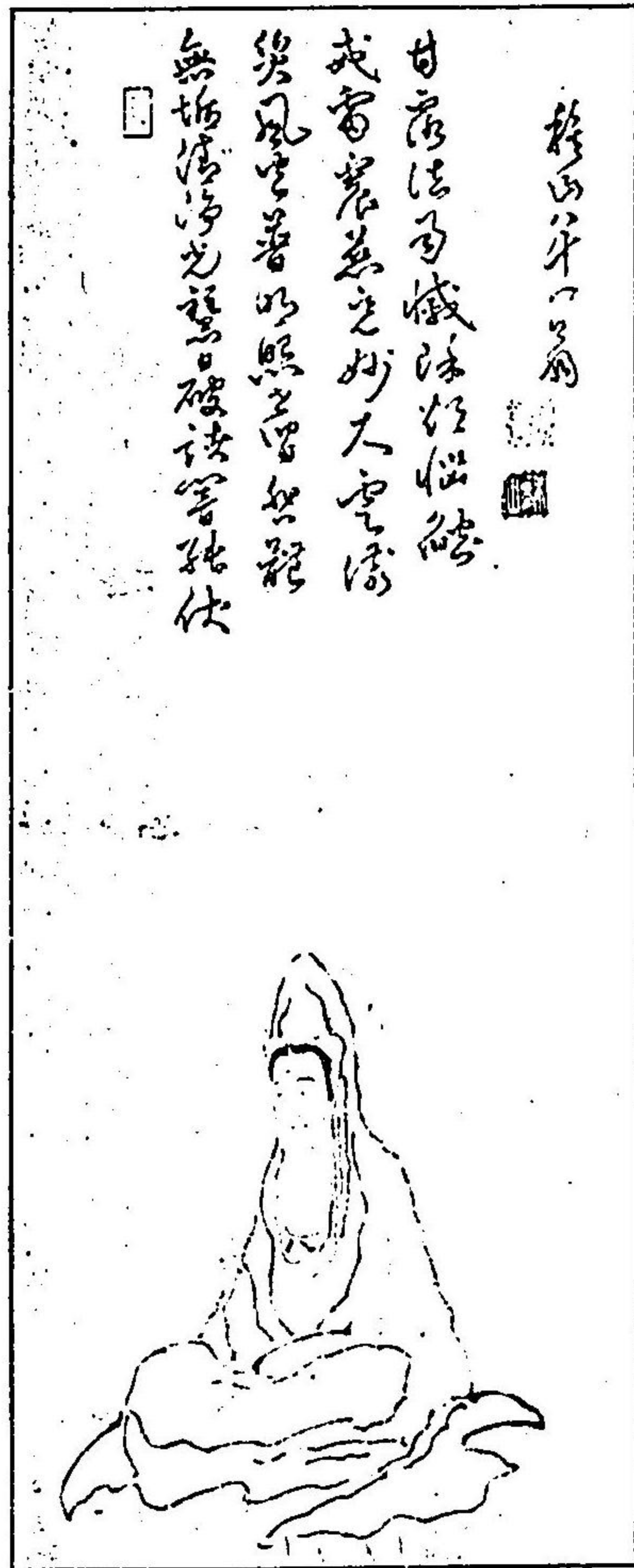
○法上云

○法上云

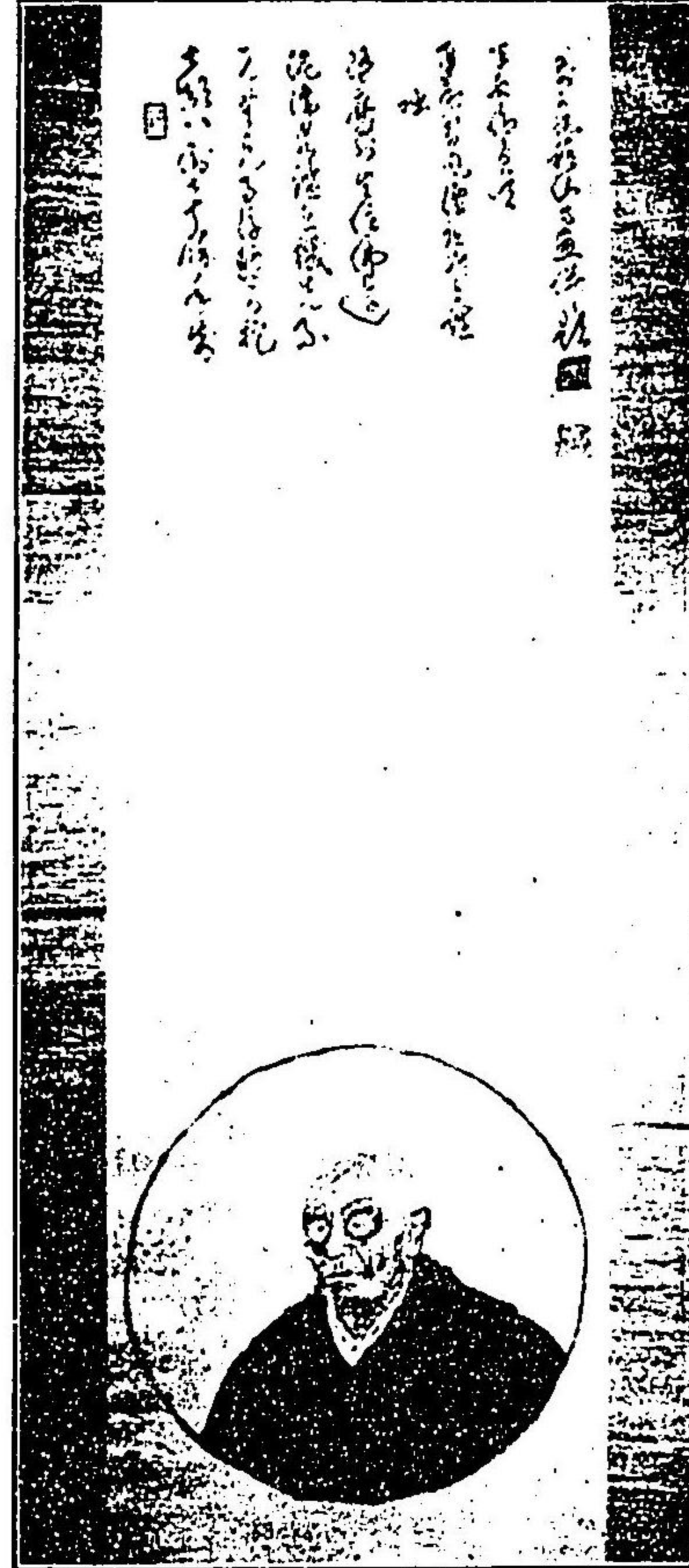
○法上云

○法上云

○法上云



圖の音觀筆師禪國淨心直



贊自畫自師禪國淨心直

自畫自賛の肖像に就て

丘 宗 潭

二十三日出書面、只今第一讀致候書中の件々正に了承、就中萬俣和尚著書拜受されたこと
第一の賜ものなり、先師の靈骨を得たると更に別なし、大切に保護可被成候

又老僧自畫賛の像寫眞にして公にするは何より好き事なり、天下有縁の衆生に見聞せしむれば、更に道念を増す事と存候間使用するも差間なし、右自畫賛に付て感慨談とこそか大に説あり、左に申述候。

明治何年であつたか、可睡を隠居して閑散の身となりたれば、眼藏を講じて汝等の爲めに模範を遺すから出て來いと云ふ書面であつたから、飛驒の山奥より得々と出て來て講筵に列した、聽講者は拙者と筒川方外原宣明、秋野孝道諸師が上首で惣計四十名であつた、拙者と筒川とは寮舎の都合上、島田町某の隱宅を本陣と定め、日々午前八時に出席して聽講した、寒中北風に吹き捲られて歩行するも寒さに不堪、然れども聞法の悦に充たされて居る事なれば、開講の初日より徹講の日に至るまで、一席も缺さず遺憾なく聽講

したは千歳の賜ものと思ふ、或時予は老僧に向つて、先年可睡齋にて開筵遊された時と今日の眼藏とは非常の相違であります、例せば先年の提唱は例に依つて例の如しと云ふ口調であつたが、今日の開示は眼藏の外に立つて眼藏を翻轉せらるゝの差あり、眞に眼藏に熟達されたは今日ですなあと申上げたら、老僧そう聞へるか、何でも長命せねば駄目だよ、七十以上にならねば眼藏にならぬから、眼藏になつたから眼藏が讀めるのさ、貴様も長命して眼藏を讀むがよい、眼藏は六ヶ敷はない、眼藏になればさらくと讀める譯だと云ふ話であつた、是より拙者は朝夕參得を缺いた事はない、一句一字の不審まで參じた、此の講筵にて得る處些少ではない、老僧を現在の承陽大師なりと戀慕する念は全く此時より生じ、朝夕老僧の法臘延長を祈らざる時なしてあつた、眼藏も無事講了の時に當り、老僧の膝下を離れて飛驒の山奥七十里程歸るのは即ち正法正師を隔つかと思ひ去り思ひ來れば、何となく落涙千萬行、送行するに忍びなかつた。

送行前一日、上方丈して色々獨參の後、禪師さま誠に鐵面皮の御願ですがどうか聽いて下さい、私あなたの膝下を去るのが何となく慕しくつて堪へられませんから、是非とも此の絹にあなたの像を自畫自賛してください、之れを拜受して歸房し、日々あなたに奉

ずる心地にて再會の期を待ちますと云ふたら、禪師直に御許しあつて揮毫されたのが即ち是れてある。

贊語の中、知見無見、不墮魔外、豈任佛邊の句が拙者に證明された處である、又老僧の生涯も此間に存在して居る、脚句七言二句は老僧の三十二相八十種好である、老僧常在不滅ぢや、日々此處に於て相見了して居る、難得畫贊だ、拙者參盡するところあり、某畫工に命じて牧童斷鼻繩圖を作らしめ、贊を求めたら、老僧筆を援つて、

牛牽牧也牧牽牛。 牽去牽來不決優。

繩斷始知無彼我。 倒眠橫臥共悠悠。

と題してくれたも此の時だ。

老僧のことを彼れ此れと吹唱する者があるが、老僧の堂奥はなかなか深遠幽邃で、外人の知ることを許さぬ、遺偈の末句に、月冷風寒とあると、自贊の脚句、月落霜風潭底冷、與誰半夜仰蒼天と異音同調、初後一枚だ、老僧の道念定力が活躍して居るではないか、座下も遺弟たるに不背と云ふ工合に、修練して月冷風寒き境界になるがよい、老僧定て呵々大笑し王ふらん。

右自贊自畫の軸は、般若臺に掛けて四十九日まで供養せよ、七日七日には讀經せよと申置きたれば、隨意に撮影するがよい、當方にては寫眞を供養して居る、昨夜はとろゝ汁に大根油揚のぐづ煮の御馳走にて、隱居和尚と讀經し、三七日の回向して、老僧の寫眞の昔話をした、何となく感慨に不堪であつた。

二十四日午後

霞 丘

惟安和尚座下

(右は丘老師が旅行先より岸澤惟安師に與へらたる手簡なり、自畫自贊の肖像は口繪に撮ぐる所のもの即ち是れなり)

はしがき

坦山和尚が嘗て月潭老人に正法眼藏を借り、「何だ手入れ本手入本と大騒ぎ行るが、文字の音訓やら私記等の書き入れやら全然て子供欺しだ」と獨語せしを、老人が襖越しに聞かれ、「應さ俺の手入れ本は子供のやうなものに方角を示すが本意にて、お前のやうな善知識に視さんとするものでないから」と仰有つた。先師の手入れ本も其れだ、法益も其れだ、殊に此の普勸坐禪儀提耳録は、先師が始めて錫を横濱に移し、眞宗信者の多かつた平樂會に於て提唱せしを筆記したものだから、一層平凡だ、巻首に出した書き入れも筆記の後に附した備忘も、ともに月潭流だ、一切押つ括めて子供欺しだ。前年觀樹將軍が、「なぜ宗門では面山様の事を婆婆と申しますかと尋ねられた時、先師は「俺の事は世間で未だ爺爺としか言ふてくれませぬよ」と答へられた、爺爺の子供欺し、或る時は館を遣り、或る時は拳を固む、然れとも敢て天下の善知識に披露せんとするにあらず、たゞ禪の如何なるものかといふことをもえ解せぬ人に、聊か方角を示さんとするのみ、罵倒するものあらば罵倒するに一任せん、罪は家醜を外に揚げし惟安、甘して受けんのみ。本書の巻頭の普勸坐禪儀の原稿は、先師の筆である、今こゝに掲げて參學の高流に示す。

明治四十四年一月先師の大練忌に當れる日

末後の弟子芳惟安謹んで識す

普勸坐禪儀

原夫道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費功夫。況乎全跡迥出塵埃。孰信拂拭之手段。大都不離當處。豈用修行之脚頭者乎。然而毫釐有差。天地懸隔。違順纒起。紛然失心。直饒誇會豐悟。獲警地之智通。得道明心。今舉衝天之志氣。雖逍遙於入頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。矧彼祇園之爲生知。今端坐六年之蹤跡。可見少林之傳心印。今面壁九歲之聲名。尙聞古聖。既然今人盡辨。所以須休息。尋言逐語之解行。須學回光返照之退步。身心自然脫落。本來面目現前。欲得恁麼事。急務恁麼事。夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。尋常坐處。厚敷坐物。上用蒲團。或結跏趺坐。或半跏趺坐。謂結跏趺坐。先以右足安左脛上。

左足安右膝上。半跏趺坐。但以左足壓右膝矣。寬繫衣帶。可令齊整。次右手安左足上。左掌安右掌上。兩大拇指而相拄矣。乃正身端坐。不得左側。右傾前躬後仰。要令耳與肩對。鼻與臍對。舌掛上腭。唇齒相著。目須常開。鼻息微通。身相既調。欠氣一息。左右搖振。兀兀坐定。思量箇不思量底。不思量底如何。思量。非思量。此乃坐禪之要術也。所謂坐禪。非習禪也。唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。公案現成。羅籠未到。若得此意。如龍得水。似虎靠山。當知正法自現前。昏散先撲落。若從坐起。徐徐動身。安詳而起。不應卒暴。嘗觀超凡越聖。坐脫立亡。一任此力矣。况復拈指。竿針。鎚之轉機。舉拂。拳棒。喝之證契。未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也。可爲聲色之外威儀。那非知見之前軌則者歟。然則不論上智下愚。莫簡利人鈍者。專一功夫。正是辨道。修證自不染汗。趣向更是平常者也。凡夫自界他方。西天東地。等持佛印。一擅宗風。唯務打坐。被礙兀

地。雖謂萬別千差。祇管參禪辨道。何拋却自家之坐牀。謾去來他國之塵境。若錯一步。當面蹉過。既得人身之機要。莫虛度光陰。保任佛道之要機。誰浪樂石火。加以形質如草露。運命似電光。倏忽便空。須臾卽失。冀其參學高流。久習摸象。勿恠真龍。精進直指端之道。尊貴絕學無爲之人。合沓佛佛之菩提。嫡嗣祖祖之三昧。久爲恁麼。須是恁麼。寶藏自開。受用如意。

普勸坐禪儀終

普勸坐禪儀提耳錄

西有穆山禪師口述

丘宗潭閱

法嗣惟安編

此の『普勸坐禪儀』は、御開山が『禪苑清規』にある宋朝の宗賾大師の著された『坐禪儀』を、御添削なされた様なもので、後世坐禪論等もあるが其れ等を一切肯はず坐禪の亂れたを御歎息なされて書きになつたものぢや、指月和尙は宗門の中興ともいふべき人だが、此の『坐禪儀』に『不能語』といふ註を書かれた、其れを讀むと好い、其の中に、永祖出今世獨思于古とある、全體支那も晩宋になつてから坐禪に弊を生じ、明朝になつていよ／＼甚しく、正傳の坐禪は滅却した、不幸にして其の弊風が日本に傳來した、尤も宋朝にあつても時弊に流れず、正傳の坐禪を確乎と守り、純密の佛法を舉揚せられた正師家があつた、其一人が宏智古佛で、其一人は雪竈だ、雪竈に『頌古百則』がある、後世之れを

『碧巖錄』と云ふ、其の『碧巖錄』の評を書かれたのが大慧の本師ぢや、此の大慧の頃から公案悟りが始つた、宏智古佛は雪竇の後に知られて大慧と同時の人であつたが、大慧の公案で悟らせる規則悟りとは唱へ方が餘程違ふ、大慧からは默照坐禪と誇られたが、佛々祖々嫡々相承の坐禪は却て宏智古佛が正傳した、『廣錄』を見れば直に分る、坐禪を目して佛佛要機祖祖機要と喝破せられたは實に御開山が宏智古佛と推尊する所以だ、是を以て御開山は宏智古佛に推服し、宏智古佛の道を慕はれた、宏智古佛の後に出て、當時の禪弊に流れず、確乎として正傳三昧を守り、純密の禪風を發揮したのが天童淨祖で、實に御開山の御本師だ、故に御開山は佛佛要機祖祖機要たる純密の坐禪を單傳して御歸朝になり、待悟の坐禪著味の坐禪一口に言へば弊風に、て包まれたる坐禪を御歎息なされて、其禪弊を矯正せんが爲めに此の坐禪儀を著はされた、故に宗蹟大師の坐禪儀を御添削なされたやうなものなれども、類して齊しからず、佛祖の正法眼藏だ、佛佛要機祖祖機要だ、坐禪の古實だ、指月和尚が永祖出、今世獨思、千古雖危、不難令人知禪、古實也、仍而制此篇普勸、志於是者、と言はれたは尤ぢや、晩宋の禪弊を承けたものには變だと思ふ處があらう、又變だと思ふ處がなければならぬ、變だと思ふ處が

嫡嫡の坐禪相承の古實たる處だ、苟も衝天の志氣を具し、獨立の精神を鼓し、御開山の道を慕ふものは此の古實によりて御開山の思召の在るところを知り、正傳の坐禪を修するが好い、扱御開山の思召は、『廣錄』に此の坐禪は佛佛相傳祖祖直指獨嫡嗣者也、餘者雖聞其名、不同佛祖坐禪也、所以者何、諸宗坐禪、待悟爲則、譬如假船筏而度大海、將謂度海而可拋船矣、吾佛祖坐禪不然、是乃佛行也、云云とある、諸宗は悟りの規則を坐禪とすれども、佛祖正傳の坐禪は爾うてない、坐禪が佛祖の三昧で坐するところに佛祖となり、悟りがあらはれて居る、佛祖の三昧は生生世世離るべきものでない、維摩經に不起道場、現諸威儀とある、又永嘉大師は、行亦禪坐亦禪と言はる、そこが坐禪の眞面目だ、萬劫掛りても不退不轉が坐禪だ、迷信もあれ、修證もあれ、いろ／＼の事あれども、皆坐禪の上のさま／＼の事だ、故に吾が佛祖の坐禪は不然、是れ乃ち佛行なりと仰せられたのぢや、又た『廣錄』に、初祖西來不務、諸行不講、經論在少林、九年、但面壁坐禪而已、打坐則正法眼藏涅槃妙心也、嫡嫡面授親承密印、師資骨髓證契、見傳唯此一事實、餘事即不是、と仰せられた、龍樹は七宗の祖師だ、其龍樹が坐禪則諸佛法也、而外道亦有坐禪、雖然、外道有著味之過、有邪見之刺、所以不同諸佛菩薩之坐禪也、と言はれた、今日ヤ、肺病の藥だ、ヤ、

胃病の薬だのと言ふは、テン、カ、ラ、間違ひて、是れは龍樹の謂はゆる著味之過だ、又た今日のものゝ坐禪して悟を求め作佛を圖るは樹龍の謂はゆる邪見の刺だ、二乗聲聞亦有坐禪、雖然、二乗有自調之心、有求涅槃之趣、所以不同諸佛菩薩之坐禪、二乗も亦坐禪はあるが自調の心ありて坐禪の眞面目でない、自調の心は悪るくはない、五利使五鈍使の煩惱がある見思の惑がある、自分の智が皆な知見の一つだ、知見の煩惱がある、思ふことが春の雲の岫を出づるが如く、彼れを止めれば此れが出る、なか／＼習慣習氣は止められぬ、斯う見込んだといふが見惑で、俱生起の煩惱といふて我れと同時に生れたが思惑だ、二つの中最も止められぬは思惑の煩惱だ、見惑あり思惑ありては三界を出離することが出来ぬから、二乗の人は、サツ、サ、と之れを断ず、三世の菩薩も之を断ず、煩惱妄想を断せずして諸佛菩薩となつたものは断じて一人もない、只だ煩惱即菩提と勇猛精進進力を具すれば好い、勇氣のない奴は逆も禪宗の修行は出来ぬ、何でも一度腹を切らねば駄目だ、外の腹を捨て措いて内の腹を切れ、一度腹を切らねば大決断は出来ぬ、二乗は坐禪を器械にして自分の思ふところを修行せんとするから坐禪の眞面目でない、坐禪の眞面目はそんなものではない、富士山は雪が降つても雲が掛つて

もピクともせぬ、安住不動だ、道理を考へ教相の助けとするは坐禪を器械として細い仕事をするので眞の坐禪でない、と龍樹が言はれた、此の龍樹祖師の語に繼いて、御開山は龍樹既、恁麼、道、須、知、二乗外道雖有坐禪之名、不同佛祖正傳之座也、近代宋朝諸山杜撰長老等、未知此等道理、蓋是佛法之衰微也、兄弟須知祖師唯傳佛法之正脈、面壁坐禪後漢永平以來、雖有依文解義之座、全無其實、唯獨祖師傳而已、誠是佛法之親傳者也、と仰せられた、後漢の永平以後、初祖の未だ西來せられざる以前、已に坐禪は傳つて居たが、之れを器械として依文解義、只だ言語を尋ね義理を討ぬる器械としたまてにて眞實の坐禪はなかつた、達磨大師が西來なされて眞實の坐禪を正傳した、此の正傳の坐禪のみ眞の坐禪だ、此の思召を以て此の坐禪儀を御書きなされたのぢや。

○『不能語』云、永祖出今世、獨思于古、雖危不難、欲令人知禪之古實也、仍而制此篇、普勸志於是者、是以題是篇、吾徒深思慈念、莫忘焉。

○『不能語』云、又稱禪者、而都不知正坐儀、况知此道之超脫無畏。

○『辨道話』云、釋迦牟尼佛迦葉尊者をなしく、證上の修に受用せられ、達磨大師大鑑高祖共に證上の修に引轉せらるる文。

又云修の外に證を待ことなかれ文
又云みな修證不二の深旨なり文

○『永平廣錄』云此坐禪也佛佛相傳祖祖直指獨嫡嗣者也餘者雖聞其名不同佛祖坐禪也所以者何諸宗坐禪待悟爲則譬如假船筏而度大海將謂度海而可拋船矣吾佛祖坐禪不然是乃佛行也已上

○又云初祖西來不務諸行不講經論在少林九年但面壁坐禪而已打坐則正法眼藏涅槃妙心也嫡嫡而授親承密印師資骨髓證契見佛唯此一事實餘事即不是已上

○又云龍樹祖師曰坐禪則諸佛之法也而外道亦有坐禪雖然外道有著味之過有邪見之刺所以不同諸佛菩薩之坐禪也二乘聲聞亦有坐禪雖然二乘有自調之心有求涅槃之趣所以不同諸佛菩薩之坐禪師曰龍樹既恁麼道須知二乘外道雖有坐禪之名不同佛祖相傳之坐也近代宋朝諸山杜撰長老等未知此等道理蓋是佛法之衰微也兄弟須知祖師唯傳佛法之正脈而壁坐禪後漢永平以來雖有依文解義之坐全無其實唯獨祖師傳而已誠是佛法之親傳者也面壁坐禪佛祖傳不同外道二乘禪機先開得機先眼譬如臘月火中蓮『開解』云雲居云體得底人心如臘月扇子
如臘月扇子非思取ノ境界ナリ

原夫

原夫道本圓通爭假修證宗乘自在何費工夫况乎全體迥出塵埃今孰信拂拭之手段此が大骨目だ諸佛諸祖のなされた坐禪の主意を水の源を遡りて見るに譬へば利根川は文殊岳の利根の口より出づるゆえ利根川といふごとく坐禪の源頭を尋ねて見るに

道本圓通爭假修證宗乘自在何費工夫

法ノ上カラ云フ
圓通解脫ノ境界ヨリ見レハ修證ハ松筏ナリ
正宗ニ乘スル時自在無礙
功効
生佛一如道即實相無相顯名云道本來周圓隨通超越六凡四聖境界見於此道修證實松筏故云爭假也

道は種種ある虚無恬澹は老子の道で道の一つだ又た仁義忠孝は孔孟の道で是れも道の一つだ其の道だ一口に言へば平生それは道に稱ふとか道に背くとか言ふ其の道だ取るべからざるものを取るは道に背く親不孝は道に背く夫婦別なきは道に背くと言ふが今御開山の原夫道本圓通と仰せられるところの道はそんなナマやさしいことではない道の道を遡りて餘道に勝れたるところの佛道を生佛一如道即實

相無相強名云道此のことぢや、そこで此の道を合點した人すなはち佛法で謂ふ大道を合點した人、合點といへば見性したこと、ところが悟道した人に間違ひが多い、其人の一生涯を通觀しなければ、ホソマに悟たか否かは分らぬ、御開山は身心脱落て悟られた、其の悟つた話は分るがどれ程のところを悟つたかは分らぬ、洞山様は師の道得佛法を貴はず、只だ我が爲めに道破せざりしを貴ぶと言はれた、ところが、一たび死して一七日の後に生き返りて、恐痴齋を設け、大衆に供養せられた、或は首を斬られて白乳を迸し、或は平然として春風を斬るが如しと言はれた、祖師方もあつた、又た古人に坐脱立亡の方も、澤山あつた、遺偈辭世を書いた方もあつたところが、その遺偈辭世なるものが語は到りても、道を得たか否かは分らぬ、其れは一生の經歷を見た上でなければ、何とも言へぬ、先づ道は空と云ふが、空も道でない、般若六百卷は空を重重に説いた、本來無一物を空と思ふのみならず、空見にもならぬ、眞の空見は二乘聲聞の人にある、空見に徹底すれば、決して妄想煩惱や瑣細なる名利に動さることはない、只だ空といふ話を文字の上で覺えたのみゆえ、利衰毀譽等の風が吹いて來れば、直に動かされて、木葉微塵ぢや、眞の空見に徹底したものなれば、たとひ三尺の秋水を上段に振りか

ざして眞向より打ち下すとも、ビクとも動くものでない、ところが空といふが嘘だ、眞の空は廣大だ、暑いからと云て避暑に往つたとはない、寒いからといふても動かぬ、ところが見ゆるから嘘だ、天地の空も天地一杯に詰めるときは空がなくなる、見ゆる空は空でない、目に見えぬ空を合點したのを指して真空といふぢや、併し空がなければ有がない、有がなければ空もない、有空は相對のものゆえ、有空ともにならない、其れを超越するが大道だ、故に大道は性清淨といふぢや、六祖大師は自性清淨を悟られたから、本來無一物、何處惹塵埃と言はれた、自性清淨を徹見したから、煩惱の塵埃が着きやうがない、空相は潰すことが出来るが、そこを通り抜けて合點したとき、尻が落ち着いて一寸も動かぬ、故に肇法師は首を斬られるとき、春風春風を斬るが如しと言はれて平氣であつた、馬祖や雪峯や巖頭杯は豪傑だ、拵へ物の豪傑でない、眞實の道の根本を極めて居るから動かしやうがない、經では四十二位や六即で驗するが、此の修行は容易ではない、天台大師は觀行五品の位といひ、御開山は十地以上だといふ、十地以上は菩薩の中でも、エライ、洞山様の五位に向道の位あり、又た石霜に休去、歇去、冷湫湫地去、一年萬年去、寒灰枯木去、古廟香爐去、一條白練去といふて七去がある、此の七去に指月和尚

が一著語を下した其の初めの休去の著語は如向郷と言ふので次の歌去の著語は如復道と言ふのぢや何でも修行の小口が見えざれば志が起らぬ古郷を思はざれば修行せんとする志は起らぬ一旦志が起れば人の世話を借らぬ三因佛性の中にも縁因佛性とて人人本具の正因佛性ある上に或從經卷し或從知識して始めて志を起し此の事有ることを知つて修行さへすれば佛となれるわいといふが郷に向ふところだ五位の向道の位だ先づ道は何處らを道とすべきか村道もあり縣道もあり國道もある大地に就いてだ大地に就いて物が動く空は鳥が歩りき水は魚が歩りき只だ礙りなく歩るけるものを道とす今世より未來まで六道礙りなく歩るけるを大道とす六道に通ぜざれば六道を輪廻して其の衆生を教化することは出来ぬ扱世間で見性成佛見性成佛と口癖のやうに言ふが一體其の性を何う見るか性の本體を圓といふ其本體は六道に通じて碍りがない故に圓ぢや妙用無碍にして礙りがない道は圓にして凡夫といふ角も佛といふ角も菩薩聲聞といふ角もないところが凡夫は角なきに角を立てイヤ親類だイヤ朋友だイヤ迷だ悟だといふ角を立つ畢竟は角を立つるゆえ凡夫なりぢや故に凡夫でも堪忍強きを角を取れたと云ふ角が取れたから圓だ無

碍自在無際涯だ凡夫は種種の煩惱の角があるゆえ圓とは言へぬ然るにどう動いても妙用で礙りがない人形が吉原に素見に往つたやうなもので何でも角が取れば無碍なるゆえ透り抜ける之れを道といふ圓通の二字で道の字を釋すその道は六凡四聖十界透り抜けて居るから修行は要らぬ圓通にして無碍なるゆえ修證はない一休は悟り杯といふ無調法致した覺無之候と言はれた此れが三界の衆生の了見を透り抜けて居る悟だ證入は此處等にあるな公案を講じて悟れるなれば老僧は疾くに悟つたに相違ない併し今日も悟つて居るか何うだか分らぬ只だ幾ら鈍才でも昔の修行を慚愧し古人を歡喜するやうになつた道は圓通ゆえ修行すれば修行するだけ證は來る圓通無碍なるゆえ空の如し空なるゆえ夏は熱くなり空なるゆえ風が吹けばガサ／＼と鳴る故に因果は造り物にあらず私なきゆえ修するところに證は來る修行して證の來らぬといふことは會てない圓通なるゆえ修證があるぢや併し圓通の大道より見れば修證も大道の面にて修證と斷るに及ばず諸佛のまさしく諸佛なるときは自己は諸佛なりと覺知することをもちゐずしかあれども證佛なり佛を證してもてゆく大道と修證との間も亦た爾うぢや其れを心得違ひして因果

を撥無するものは道の圓通を知るものでない、孔子は常に「學則祿在其中」と言ふて教へられたが之れが因果ぢや、因果は自然なものだ、道は學ばぬて出来るものでない、祿が道でない學が道でない宗といふも道といふも同じことだ、宗は先祖と同じた、尊ぶと見よ、乘は乗り物だ、宗乗の二字にてたつとぶところの乗り物に乗る意ぢや、大乘は天地を載せるから大きい、小乗は小さい、其處に往くところは妙用無碍自在ゆえ功夫も何も要らぬ、二乗は自調の心を以て涅槃を得んとするから間違だ、悟を得んとするも貪欲だ、成佛したいと思ふも貪欲だ、人死留名といふも貪欲だ、縦し名を留たにもせよ、其れが用になるかならぬか分らぬ、其の分らぬ物に貪著するから貪欲の部類に屬す、只善貪に屬するか惡貪に屬するかが考へ者だけぢや、道の本體を見付けるに至りては修證功夫は要らぬ、初果を見道と曰ひ二果を修道と曰ふ、有學道無學道無學道に入らねば可かぬ、へり、キリが取れ悟が行にあらはれたを無學の人悟つた人と謂ふぢや、何うしても此處に至らねば話にならぬ、斷ずべきは何處までも斷ぜよ、何も遠慮には及ばぬ、福分がありても壽命が盡きれば死なねばならぬ、一寸も私を許さぬ、何と言ふても修せねば駄目だ、修すれば證が其の中にある、修行して食へなくなれば死ね、サ

爾う往けるか往けぬか修して見よ、死後になつて日本橋の大市場に立つて天下の大相場に掛けて見よ、其れ迄は初果二果外道、宋朝以還の悟はあるが、其れは其れに任せて人の悟を借りるに及ばぬ、人人は人人に修行するが好い、此の自性清淨を合點するに至りて功夫は要らぬ、之れを一超直入如來地と謂ふ、桶狭間の合戦に今川義元の手元に五百萬の勇士が擁護して居たにも拘らず直に義元の幕下に切り込んで、ソツ首を取つた如く人情は入らぬ、遠慮には及ばぬ、塊を逐ふ犬となるな、直に塊を擲つたものの手下に喰ひ込んで息の根を止めよ、爾う往かねば修行でない、大將の首さへ取れば餘は論するに足らず。

- 『四十二章經』云、無念、無作、無修、無證、不歷諸位、而自崇最名之爲道。
- 『大論』六十三卷云、爾時舍利弗白佛言、世尊、是淨甚深、佛言、畢竟淨故、圖是清淨有種種名字、或名如法、性實際、或名般若波羅蜜、或名道。
- 『名義集』卷五、肇師云、道之極者、稱曰菩提、秦無言以譯之、後代諸師皆譯爲道。
- 『楞嚴玄談』云、理絕修證、事存階漸、偏一則病、空有圓通、則融真俗、○楞嚴六注云、性體曰圓、妙用無礙曰通、乃一切衆生本有之心源、諸佛菩薩所證之聖境也。

況乎全體^{人ノ本體カラ云}迥出^{一塵埃字塵拂拭字}塵埃^{皆就全體之上說故或云迥出或云全體}兮孰信^{而掃之}拂拭^之手段^之

一念不生全體現ずて、一念纔に起れば直に飲みたい食ひたい面白い、もつと欲しいと直ぐに第二念第三念に流れ全體を失ふ、鏡は全體を顯した事はない、鏡を見んとするとき我が顔が疾くに鏡に映つて居るから、鏡の全體を缺く、又た我が顔が映つては可かぬとて裏に廻れば見えぬ鏡の用をなさぬ、鏡を鏡て見れば始めて全體が見えるぢや、故に性を見んとするときは見んとするが本體となりて全體が隠れる、其處を透り抜けるを荆棘林を透過すると云ふぢや、此處だらうか彼處だらうかと言ふとき、だらうが主人となりて全體は現ぜぬ、張拙秀才は、一念不生全體現と言はれ、丹霞子淳は五位の序に於いて、全體即用枯木花開、全用即體、芳叢不豔と言はれた、又全體即用櫻木を打ち破り見ればと言ふときは已に花を尋ねて居る、花に櫻の性が顯れて居る、花の外に櫻なく櫻の外に花なし、全體即用た、全、大道圓通を悟つた人は其悟が左之右之に現はれて來るところに圓通の妙が顯る、ぢや櫻の木なれば櫻の花が咲き、桃の木

なれば桃の實が生る、故に御開山の坐禪の示し方は六ヶ敷いから流行らぬ、人機が相應せぬと善悪は亂れる、曹洞の坐禪は面倒といふが、此の坐禪儀を讀めば我が宗のことは分る、先づ御開山の坐禪は斯うだ、全體は本體本來の面目といふと同じだ、神秀大師が時々勤拂拭、勿使惹塵埃、といふ偈を作られた、是れは五祖大師が我れの氣に入つた偈の出來たものに嗣法させると言はれた時の偈だ、全體神秀大師は博學精經にして當時黄梅下七百人の上座であつたから誰れ一人何とも言ふものなく、衣鉢は神秀大師に傳授するが相當だと思ふて居たところが、六祖大師はわづか八ヶ月の隨身なれども之れに和して、本來無一物、何處惹塵埃、とやられた、神秀大師の清淨は洗ひ上ての清淨なれ共、六祖大師は塵埃も清淨だ、之を合戦に譬ふれば神秀大師は敵を打ち殺して勝利となすのであるが、六祖大師は敵を合せて味方となすやうな者ぢや、故に道の全體は迥に塵埃を出て居る煩惱妄想を捉へ來つて能く考へて見よ、煩惱妄想に根が有るかな、煩惱妄想に根があれば清淨とは言へぬ、根がないから煩惱妄想も清淨だ、煩惱妄想を煩惱妄想と徹見して其に顛倒されぬが悟つた人だ、大抵は煩惱妄想を可愛がり大事に守りて成長させるから、年寄つても廓落たる境界が得られぬのぢや、煩

惱妄想の以前に遊ぶが無一物だ、迥出塵埃だ、本來の面目は疾くに塵埃を出て居るのだ、然るに神秀大師の如く煩惱妄想の掃除を始めれば掃けば掃く程に煩惱妄想が起て来る、談義僧の口癖にちりあか煩惱といふがなか／＼塵沙無明の煩惱は一朝一夕に掃ひ出せるものでない、毎日風呂に這入りても垢があると同じことだ、さて一切諸法は自性清淨なるゆえ塵埃も清淨だ、そこを佛智開發といふ、塵埃を抜けて迥に塵埃の先きに出て居る、口でこそ易く言へるがなか／＼此處に至れるものでない、殊に世人は塵埃が盡きて其の代りに清淨が來り、煩惱が盡きて菩提が交代に來るやうに思て居るがそんな事があるものか、煩惱を邪魔物にして取り除けるでない、繼子扱ひをするでない、煩惱があるゆえ菩提があるぢや、衆生無邊なるゆえ諸佛も無邊だ、無佛法といふが其の時已に佛法を超越して居る、佛法を一超して佛法を攻撃せんとしても遂に佛法に入る、森某といふ儒者が佛法を攻撃せんとして佛法を研究した、研究した結果攻撃ところが有り難くなつて隨喜の涙を流して『護法資治論』を書いた、故に佛法を攻撃せんとすれば佛法を知らぬが好い、佛法を知れば佛法に引込まれて攻撃することが出來なくなる、張無盡居士も其の一人だ、朱子杯も佛法を餘程稽古した、韓退之

が大願には一言もない、却て大願を稱して實能外形骸と言はれた、是れ位に感心して居ることゆえ大願に叩き著けられて喫驚したに相違ない、此の退之の言は悪口ではない、感服して居る語だ、故に此の一段でも道を眞實に修行せねはならぬことが分る、小刀細工は止すが好い、早く遣つて仕舞ひたい杯といふやうな小量ではとても往けるものでない、神秀大師の如き小刀細工は信せられぬ、全體迥出塵埃、實に是れ本來無一物と言はれた六祖の法孫の語だ。

○全體、張拙秀才云、一念不生全體現、武溪集云、一念生時全體現、驢腮馬額紫金容。

○丹霞淳五位序云、全體即用、枯木花開、全用即體、芳叢不艷。

- 公案現成 羅籠未到
- 本來面目現前 身心脱落
- 正法自現前 昏散先撲落
- 全體 迥出塵埃
- 本來無一物 何處惹塵埃
- 一念不生全體現 敬即菩提
- 又但盡凡情 別無聖解

下道ト全體トノ上ヲ括リテ大都ト云フ
 當處湛然
大都不離當處兮、豈用修行之脚頭者乎。
（以上向）
 全自道上一云也、一塵不立法性無漏ヲ示ス

前の道と全體とを括りて太都と言ふ、何にせよ修行は我が脚下を離れぬ、一言半句何處から來て何處に往くか、一念起れば其の一念に向つて前念か後念か能く參究せよ、行脚とか偏參とか言ふて出て歩くには及ばぬ、どつしり坐して居るところに大道がある、一體自分は何處から來たか何處に往くべきか、惜しい物欲しい物は持つて旅行が出来るか、善く能く脚下を照顧せよ、何も角も抛り出せ、是れからは是れまでは悟前の修行だ、是れからは是れまでは悟後の修行だ、何の角のと階級悟りをして一つ透つた、二つ潜つたと、まるで箱根のトンネルでも通るやうな修行を爲るてない、無念無作修なく證なく四十二位の階級を経ずして自ら崇最なるを道と謂ふ、是を以て御開山は豈用修行之脚頭者乎と仰せられたのぢや、無理はない。

人ト道トノ上ニ差アレハ紛亂也

人ノ上ノ迷ヲ云ヘハ

差ハ逆順ヨリ起ル

以上ハ迷テ失レ頭

然而毫釐有差、天地懸隔、違順纒起、紛然失心。

以下使三人合其道有過不及深戒欠三身之活路一

冒頭の提唱を聴かずして此の文から聞くと何だかさつぱり解らぬ前の文に全體迴

出塵埃とある、悟ることは何うしても悟らねばならぬ、文字に依らず、解會に依らず、確乎と自得するところがなければならぬと言ふて、坐禪を悟の器械と思へば間違ひぢや、悟を教ゆるばかり道理を知るばかりなれば坐禪せずとも好い、坐禪は佛祖の三昧王三昧だ、坐禪は佛佛要機、祖祖機要だ、坐禪は行佛の威儀だ、坐禪が直に佛體だ、數息觀不淨觀骨鎖觀等は、心頭が定らぬ心頭の定らぬ者の色情に迷ふものには不淨觀を勧め、骨鎖觀を教ゆるが是れ皆な坐禪の一分て坐禪の全體ではない、坐禪の全體は迷悟を超越し、凡聖を脱落し、生死を透過し、是非も寄り着くことを得ず、善惡も方角付かぬ坐禪する直に佛體ぢや、全然圖作佛の必要がない、其れを迥出塵埃と謂ふ、一念纒生全體動て一波纒に動する處に萬波隨ふ、其れと反對て一念不生の處、凡なく聖なく菩薩とても佛とても戒名は先方の付け次第で、此の時一念不生全體現すぢや、然るに一念生時全體現と言ふことを得るぢやと、之れを聞いて奇怪の感を懐くは修行が足りぬからぢや、成程一念不生と一念生起とは一寸反對のやうに聞ゆるが其一念の起る處があるか、來處があるか、念の起つた當處に去來なく是非なく得失なく起つたなりに前後際斷して居るから起つても全體だ、此の身も過去一念の業に由つて受けしのみ

前後なく去來なし、一念迷ふところより業を作り其の業に由つて此の身を受けたる
までだから念前念後本來の面目だ是非得失はない、其れを全體迥出と謂ふ貪瞋癡
の三毒と言ふが、貪にも善貪あり惡貪がある、其の貪欲が思ふ通りにならぬと瞋恚
を起す、喧嘩も瞋恚だ、戦争も瞋恚だ、瞋恚も貪欲もなければ苦もなく樂もない、動靜二
相了然、不生だ、而るに、若しも此の動靜二相了然、不生を聞き損して頑冥不靈にして空
空寂寂の境と心得、徒然爲すこともなく安心して居るは愚癡ぢや、其の愚癡より偏見
を起し邪見を起し、五利使五鈍使の煩惱を起す、其の煩惱は雨のごとく風のごとく恐
しい勢であるが、本と水中の月を捉ふるがごとく空中の風を捕ふるが如く取ること
もならず捨つることもならぬ、妄本と無體なるがゆえに妄想の摺り抜けたところを
全體と謂ふ、故に一念生起の上にも一念不生の處にも全體があるぢや、此の消息は師
も之れを弟子に傳ふことを得ず、弟子も之れを師に奪ふことを得ず、冷暖自知するよ
り外はない、煩惱妄想にあづからぬ、全體は自得するより外はない、本體を見届け活眼
を開いて見るから私がない、私がないから明瞭に見ゆる、佛が一切智一切種智を具足
せりといふは其處だ、其處は坐禪より外に求めやうがない、道本圓通爭假修證を修行

して往く場もなく來たる場もなく、圓通なる故道より進んで我れを得ふことなく、
道より運びて我れを悟らせることもない、故に大道直如砥といふぢや、こゝからは迷
を述べ、其の通り道は圓通にして周遍法界妙用無礙滞りなく差支なければ、凡夫自
身が自ら滞り自ら差支を作り偏見我見を生じ自らの繩に自ら縛せらるゝぢや、境は
微塵も味さず、依怙はないが、一塵も差あれば天地の相違を生ず、一言以て國を興し一
言以て國を亡す、毫釐有差、天地懸隔、是れは人の上に掛けて修行を述べた、道の上より
言へば全體迥出、塵埃だ、道本圓通爭假修證だ、人の上より言へば毫釐有差、天地懸隔だ、
本と此の語は三祖大師の『信心銘』に、毫釐有差、天地懸隔、欲得現前、莫存順逆、違順相爭、是
爲心病、二見不往、慎勿追尋、纒有是非、紛然失心とあるが、出處ぢや、違順の境、人に對する
には悉く違順の境あり、境に違へば怒り順へば愛着を生じ、一切の物が順逆のため
顛倒されて本心を失ふ、尋常堪忍が一生の祈禱だと言ふが違といふて事が違ふて來
ること、苦む順境はづらくと往くて樂む、是に於て注意せよ、其の中順境は流れ易く
して危い、見よ嫌ひの物に食傷したためしなく、好きな物には胃病を起す、人に誤られ
詐僞に掛るは主として順境より來るぢや、順境は能く能く注意せねばならぬ、違境は

注意すれば逆はぬやうに出来るが、順境は順當に來るから自然に欺かれ易い、違順の境に移されぬが修行で、違境に對して怒り順境に對して愛するは一事相に於て免るべからざるところで、修行の入るところぢや、又た理相の上にて迷ふ、此の迷ひは知れぬ。○『信心銘』云、毫釐有差、天地懸隔、欲得現前、莫存順逆、違順相爭、是爲心病、二見不住、慎勿追尋、纒有是非、紛然失心。

「假設之辭」

「過目也」

直饒誇會豐悟分、獲瞥地之智通、得道明心分、舉衝天之志氣。雖

（以下悟重頭初迷失頭今悟重頭兩處同安也於本來解脫中已成悟成迷藥病相對未爲平時之平體矣雖免初執事也今亦病契理之悟也所謂認從前識神者契悟之有迹是爲第二機不能語）

「剛翔自適」

「迷悟超越活達無碍玄路不守田地超出」

逍遙於入頭之邊量、幾虧闕於出身之活路。

「田地ニ投入」

趙州の無を透つた、ヤレ、栢樹子の公案を徹底したと言ふて其の得悟を誇り、又た瞥地は過目の義といふて、チ、ラリと那邊と相應して智慧の通達を得て道を得た心性を明めたと言ふ、其の心性は如何なる物か、曰く、不思善、不思惡、善惡を超えて居る、是れは理窟て理に迷ふ、道理も決してあてにならぬ、自分の妄想で佛法を解釋するから佛教では

ない妄想だ、佛教は、テ、ッ、ベン、から妄想を抛ち愛着する身を抛ち、身心を放下して佛教が吾、吾が佛教、坐禪儀が吾、吾が坐禪儀、坐禪儀が坐禪儀を講釋し、吾が吾を講釋するてなければ何にもならぬ、碧巖百則位、聽き覺えて蓄音器となるも吐き出して仕舞へば、其れだけで五尺の身を潤す修行はない、故に御開山は之れを許さぬ、而るを瞥地の智通を得たと言ふので、天を衝く勢で、疊を叩き、起て舞ふても修行に於て何にもならぬ、故に落着拂つて自得したやうでも一つ超出して毘盧の頂額を越過し、佛地にも居らず、無間地獄に入りても恐れず、無我無人無衆生無壽者名聞に著せず、利養に繋かれず、脱然たる境界を得ざれば話にならぬ、名利の二つは總に我れを顛倒させて一息截斷の時用をなさぬ、到底出身の活路を得ることはならぬ、今日の者は饒舌することはえらいが、蓄音器の吐くときはえらいと全じこととて、脚下は、ダ、メ、ヂ、ヤ、行住坐臥進退語黙を見ると、イヤ、ヤ、呆れ返つたものだ、卑劣な根性、卑劣な品行をそれでは禪宗の蓄音器と言はねばならぬ、之れを虧闕於出身活路と云ふぢや、迷にも居らず、悟にも居らぬ、故に契理亦非悟だ、事相の上肉體を可愛がり、衣食住に迷ふは勿論執事のであるから、悟りてはない、何の理角の理と理窟を並べるも悟てない、永見寺で或る奴が一つ東山水上行を呈し

ませうかと言ふて、ヒヨコ／＼歩るいたが、彼れは理を一つ持つて居るので、理に迷ふたのぢや、依然として出身の活路はない。此處は言語で述べられぬ、能く修行して自得するが好い、幾ら悟つた悟つたと自ら許し自ら誇るも、無我無人脱落なる脚下超然たる境界が見えなければ、悟つたとは言へぬ。雪竇が麻三斤の話を頌して、如今拋擲西湖裡、下截清風付與誰、と言はれたが、巧妙なものだ。此處も其の意だ。御開山が能く言はれた、眞崑が天下に禮拜すべきもの一人もないと坐具を縫ふて恐しい勢で衝天の志氣があつたが、後に慈明に逢ふて省あり、始めて出身の活路を得た。其の消息を得るは此の坐禪だ。一機一境猫のチヨツカイ掛けたやうな坐禪は役に立たぬ、後心は語に參ると言ふから、文字にも注意せねばならぬが、初心のものは微細に一法界一佛理に參ぜねばならぬ。

○睦州示衆云、爾等諸人還得入頭處也。未若未得箇入頭須得箇入頭。若得箇入頭不得辜負老僧。

矧彼祇園之爲生知兮。端坐六年之蹤跡可見。少林之傳心印兮。

以上佛祖證跡三下劣諸人示三昧證雖佛祖不可忘是迷悟超越證不二三昧也。生而知之者上也。大乗小乗機見別依二般若文二降伏五逆冤方便善巧也。

面壁九歲之聲名尙聞。古聖既然。今人益辨。

「面壁云ナゼニ辨道ニユルキソト勸誠也。不能語云古之有是道今之豈不辨是勸諭之切思矣。」

昔此の六年九年を解し誤つたものがあつた。御開山の御本懷は釋尊と初祖とを引いて、坐禪は佛行て悟の栴梯でないことを證據立てたのぢや、其れを六年九年に力を入れて六年は悟前の坐禪、九年は悟後の修行だ、杯といふ奴は、テ、ンから御開山の引證なされた御本懷に負く、祇園の生知とは釋尊のことで、六年坐禪して六年目に明星を見て悟られたから、六年は悟る前の坐禪と言ふが爾うでない、生知とは如來は法華にも久遠實成の佛とありて、十九出家三十成道の佛でない、『圓覺經』には、衆生本來成佛といひ、『涅槃經』には、一切衆生は皆な如來の智慧德相を具有す、只だ妄想顛倒のために執着して證得せぬまでぢやと言はれた、是れ皆釋尊の生知たる證で、其の佛が坐禪を離れぬ例は、法華を説きなさるには無量義處三昧、楞嚴を説きなさるには楞嚴三昧に入るといふ、鹽梅で、佛が坐禪を離れたことは決してない、單に六年端坐とあるから、悟前の修行だ、杯と途方もないことを言ふが爾うでない、佛は永劫坐禪を離れぬとい

ふ證に引かれたのぢや、面壁九年も爾うぢや、初祖の坐禪は九年に限つたことでない
今日も尙ほ定を起たず、儼然として十法界を坐斷して居る、初祖は悟らんがために支
那に來られたてはない、邪解に誤了せられてはならぬ、古聖既然、今人盡辨とは早く言
へば坐禪せよといふことぢや、如來は悟前だ、初祖は悟後だ、杯と言ふな、初祖は九年
といふが生涯の坐禪、如來も六年許りてない故に寂滅道場を起たずしてもろく
の威儀を現すとあるではないか、ツマリ、佛も坐禪した、初祖も坐禪した、みんなも精
出して坐禪せねばならぬといふ證に出したまでだ、老僧が若い時分に随分之れを
辨白せぬものがあつた、老僧舊くから疑ふた、決して邪解のものが言ふやうな譯てな
い、佛も初祖も坐禪を離れぬ、坐禪は佛祖、正傳三昧だ、而るを祖師九年面壁爲訪知音と
言はれた古人もあつたがそんなことではない、又た祖師面壁何不慚惶と言はれた尊
宿もあつた、そこで瑯琊覺和尚が欲得不招無間業、莫謗如來、正法輪と尤められた、正法
輪とは坐禪のことだ、祖師面壁九年を何不慚惶と言ひ、爲訪知音と言ふは佛祖單傳の
坐禪の何物たることを知らぬから、慚惶言ふものはみんな如來の正法輪を謗する
ものぢや、一萬事を抛擲して坐禪して見よ、是れが即ち如來の正法輪だ、三毒に遇ふ

て動されず、名利に逢ふて移されず、生死に遇ふて苦と思はず、涅槃に逢ふて樂と思は
ず、一條平坦に行くが、修行だ、爾うてなければ、生知の如來が山に引つ込み、心印を傳へ
た、達磨が西來するはづがない、故に坐禪が如來の正法輪だ、達磨の命脈だ、坐禪は佛祖
の三昧王三昧だ、『四行觀』に、凝住壁觀、無自無他、凡聖等一、堅住不移、更不墮文教、此即與理
冥符、無有分別、寂然無爲とある之れを理入といふ、如來も初祖も坐禪した、如來は六年
初祖は九年、數量の觀をなさば、御開山の御本懷に背く、如來も坐禪は如是、初祖も坐禪
は如是、坐禪は佛祖の正傳三昧なるがゆえに。
○大般若經五百七十云、大德當知、菩薩修行甚深般若波羅蜜多、方便善巧、通達法性、實無
苦行、爲伏外道、故示現之。
○宏智頌云、寥寥冷坐少林、默默全提正令、○類聚五云、老宿云、祖師九年面壁、爲訪知音、若
恁麼會得、喫鐵棒有日在、又有老宿云、祖師面壁、何不慚惶、若恁麼會得、更買草鞋、行脚三十
年、瑯琊覺云、既不然、且道、祖師面壁、意作麼生、良久云、欲得不招無間業、莫謗如來、正法輪、○
永祖意、與宏智同、○大慧杲云、老胡九年話墮、可惜當時放過、致令默照之徒、鬼窟裡長年打
坐、○宋朝以來、此類多是謗正法輪也、如瑯琊宏智、少也。

○達祖云、凝住壁觀、無自無佗、凡聖等一、堅住不移、更不墮文教、此即與理冥符、無有分別、寂然無爲。

○蓋辨『家訓』下ウ九丁「當山傳來、佛祖大道、則時之運也、人之幸也、何不辨耶、此の文の何不辨耶」と蓋辨との文字同意也、如來の六年と達磨の九年とは意別なり、ゆえに辨せよの意にて蓋辨といはるゝと云ふものは誤り乎(或人の誤解)

所以須以下略斥、看語弊休承上所示之意、明三、莫入海算沙、入道次第、勸也尋言、逐語之解行、須學、回光返照之退步、身心自然脫不涉諸緣、昏散不及、寂家退步、回光止散亂、返照破昏沈、照見五蘊皆空、入流亡所知、退步承當特地新

落本來面目現前

己に坐禪は佛祖の三昧、王三昧なるかゆえ、彼の語は何うだ此の句は斯うだ、杯と言語を逐ひ廻るな、何分凡夫は言語に衝き廻さる、調べて見ると詰らぬここに衝き廻されて居るぢや、其れを公論だとか確論だとか言ふは自分の妄想だ、そんな事を學するな、坐禪するときは大膽になると言ふが大を恐れず小を侮るな、鏡は妍媸を問はず其の

儘に映す、故に衛生になるとか度胸が据るとか言ふて坐禪するは坐禪の一分の利益だ、息を吸ふに胸膈を開くから自然と衛生の法に適ふので胃病の療治のため坐禪を開いたてない、そんなことは坐禪の眞面目でない、天地同根萬物一体、天地を腹とし日月を眼となすから些々たる事に動着することはない、己に死にすら動着せぬから一身外の事は素よりピクカクハジヤツカクハセぬ、そこで度胸鍛錬のために坐禪が出来た譯でもない、坐禪は直に佛祖の正法三昧なることを忘るゝな、光を回し返りて照す、丁度日輪が東より出て西に入りて却て東を照すやうだ、何でも書物を見るに蚤取り眼になつて智慧を向ふに求むるから牛皮を破るといふぢや、扱そんな事を考へる根本智は何物だと振り返る是れが回向返照だ、其れが爲めに肺病を起し血を吐く時になりて振り返りて見る、何物が我を支配するかと振り返りて見るを回光返照といふぢや、之れがなければ可かぬ、京都の蛙が奥州見物せんとして箱根まで来て頂上に衝つ立つて見たら、奥州も京都見たやうなものだ見るに及ばぬと言ふた、さうな全体蛙の目は後にある、ゆえ衝つ立つたときに京都を見て居るので奥州を見たのではない、修行は目の付け處が肝要だ、蛙の奥州見物ては一向埒が明かぬ、能く自己の正智を回し

て自己の脚下を照顧せよ、『佛法金湯篇』に、『外觀百物謂之放光、内觀一心謂之返照』とある。是れが能く回光返照の義を釋した。如來の背中に光明がある。彼の光明を以て自己を返照することだ。人を見る目あれども自己を見る眼ある人は少い。一切の物を見窮めるは放光に屬し、我れに在る智慧を以て我れを見る之れを返照といふ。返照すると身心は脱落するぢや、身は四大の寄り合ひ物、心は靈靈照照底の物に映したもので、五年前見たもの十年前聴いたものに奪はれて居る。皆な客塵煩惱で外より來たもの外より來つて借家して居る食客だ、其の六根より這入つた食客に主人顔して蹂躪されて居るは情けないことだ、其れを知つて食客を放逐し主人の席を取り返すは偏に回光返照の功働だ、返照すれば自然に脱然として世俗の人情妄想の外に居り、超然として地獄極樂の外に居ることが出来る。之れを身心脱落といふ、併し能く能く返照して見ると脱落させたものもなく、脱落するものもなく、何時となく柿の澁の抜けた鹽梅ぢや、其れを靈魂不死とか精力相續とかいふは常見だ、又た無常と聞いてビク／＼するな、法は固より常でもなく不常でもない、水中の月は有てもなく無でもない、有無を離れて居る、此の身は四大の寄合ひもの、身受心法で四つの働さ、其の働さは水中の月の

やうなものだ、故に身心は自然に脱落して苦樂我他淨穢空有過現未も衝き抜けて居る、之れを脱落といふ、水中の月は捉ふことならず、惜いとて打破することもならぬ、故に天子に違勅の罪を以て首を取り來れと言はれてもサ、持つてお出でなさいと言つて一寸も動着せぬ、何にも用はないから自若と往く、其れは回光返照の力だ、世の善惡是非の評は先方の言ふので此方て防ぎやうがない、死後の戒名は寺の和尚の付け放題と同じことだ、そこで身心は自己が骨を折つて無理に脱落したてもなく、他から力を入れて脱落させたでもない、何時とはなしに迥出塵埃の佛身が露堂堂ぢや、其處は何とも言ひやうがない、故に『心經』に、『照見五蘊皆空度一切苦厄』とあるぢや、其れは何とも言えないに相違ない、其處は自ら認得して自ら得なければならぬ、そこで古人が皆な蒼龍窟に下りて二十年三十年クツクツと辛苦なされたのぢや、今日早く悟る奴はあやうくてたまらぬ、悟を言ふ奴が牛肉屋の二階で踊つて居る噪ぎぢや、そんなものが何うして回向返照の退歩が學したと言へやうか、出身の活路を得たと言へやうか、此の脱落の當體を本來の面目といふ、名の付けやうがないからな、扱本來の面目には五根五塵もない内外表裏もない、善惡是非もない、之れを本來面目現前といふ、され

ば悟ることは何うしても悟らねばならぬ。

○外觀百物謂之放光内觀一心謂之返照能放光又能返照此心之所以爲靈妙也(佛法金湯篇上十一丁)
○天童淨祖云要聽參禪者身心脱落也只管打坐之道理麼良久曰心不能緣言不能議直須退步荷擔切忌當頭觸諱風月寒清古渡頭夜船撥轉瑠璃地。

○身心自然脱落本來面現前「開解」云この段は一箇の肝要ゆへに委細に説べし身心とは五蘊の總名なり五蘊は色受想行識にて色の一蘊は身なり受想行識の四蘊は心なりゆへに身心といへば五蘊遣りなし若その相を分説せば四大を色蘊とす堅は地大なり潤は水大なり煖は火大なり動は風大なりこの四種が世界の中で最大なるものゆへに四大と云ふ四蘊は領納を受と云ふ取相を想とす造作を行とす了別を識とすこの五蘊は身心の二字に含めり自然脱落とは誰れが脱落させたと云ことはなしに身心は身心づから脱落なるものゆへに自然脱落といふなり自然とはをのづからにて佗の所作にあらざるを云ふ脱落とは脱は解脱の意なり落は灑落の意なりけれど文字の義ばかりにては俗書にもあることゆへに想解に墮す佛知見の正解をいはゞ身心を照見することたゞ手に鏡中の影を執が如く日月の光などを攫がごとくな

るを脱落の本義とすゆえに身心を常ともせず無常ともせず樂ともせず苦ともせず我ともせず無我ともせず淨ともせず不淨ともせず縛ともせず解ともせず有ともせず空ともせず過去ともせず未來ともせず現在ともせずたゞ不可思議不可稱量にて畢竟非思量の境界と照見してこゝに蒲團を置して安住するを身心脱落の境界とは云なりゆへにこゝは非身心の脱落とも参すべし身心の非脱落とも参すべし非身心の非脱落とも参す可しこの境界の露堂々なる時節を本來の面目現前すと云ふゆへに非本來の面目も現前すべし本來の非面目も現前すべし非本來の非面目も非現前すべしこの道理がすなち前にある回光返照の退歩なり。

欲得^{指前身心脱落}恁麼之事^{而目現曰恁麼之事}急務^{急務}恁麼事^{急務}

恁麼は如是の俗語だ是のごとき身心脱落の事を得んとならば自分て修行するより外はない金剛石も琢磨せざれば光明を放たぬそれと同じく身心脱落して本來の面目現前することを得んと欲せば急務恁麼事何でも氣力のある中でなければ修行は出来ぬ大阪に仙人と言ふて胡麻と黒豆と蕎麥粉とを食べて居つた和尚があ

つた六十まで勝手な事を仕て居て六十五から仙人になるとは随分蟲の好い話だ、老僧も食へなくなれば仙人にならうよ、姪力盛なる時大飯食ひたい時修行したならば仙人にも爲れるだらうが下手なことしたら其の和尚早く死ぬか知れぬと言ふたが、果して早く死んで仙人になれず仕舞だ、煩惱が一丈あれば菩提も一丈あり妄想が一尺なれば真如も一尺だ、人も若い時氣の十分な時仙人の修行したら爲れるか知れぬが、當り前の食事も出来ぬ時になつて仙人の修行したとて駄目の事だ、行らんと欲せば何でも早く行れ、氣力十分な時を過すな。

『恁麼』卷云、この宗旨は直趣無上菩提しばらくこれを恁麼と云、この無上菩提のていたらくはすなはち盡十方界も無上菩提の少し許りなり。○恁麼は如此也如是也。

明示正傳坐禪故改題

身ノ養生ハ即坐禪ノ用心ナリ

心ノ用方、外六塵

夫參禪者靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。

夫ハ承上云コト也

放捨諸緣而不遺自己休息萬事皆餘已事

以下至要術也今日不簡上智下愚不論利鈍者依祖要機即具坐禪事相審細參究而興理冥符有悟無悟俱入此三昧

莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。

就運轉有念意識之別

就測量有念想觀差別自血入細此四字向上法門正傳三

圖ハ涉三分別

味六祖道在心悟道在坐哉トシカレモ坐ヲステ、偏ニ悟ヲトル意ニ非ス

豈拘坐臥乎。

坐禪儀ノ初ノ首ニ見ヨ

示佛向上非思量行履不離即千四儀

參禪は成るだけ靜な所が好い、目に觸れ耳に觸るものがあつては初心のものは轉却されるからな、見るものは目を閉づれば好いが耳には困るな、此の身心を横丁に抛り出せ、一ツ身を離れて借り物だから大事にして返へすやうにせよ、父子兄弟を捨てる、是れも利のために捨てては可かぬ、捨てがたきを捨てるが修行だ、父子兄弟は捨てがたい、其れを捨てるが修行だ、日本を愛せぬものはないが、時と場合に由つては捨てる、行らぬはならぬことがあるぢや、先づ些細なことでも氣になつて眠れぬことがある、昔或人が鬚のために眠らぬことがあつた、思ふて心に關する事を止めるはなかなか六ヶ敷い、併し一つ志を立て奮發して見よ、身心を脱落し身命を抛てば修行は何でもない、昨夕枕もとて鼠がチュウチュウ鳴いて睡れなかつた、其れは何か囁られてはならぬといふ自分の物を惜しむからのこと、本を一冊施したら好からうと思ふたら睡

られた、そんなものだ、是の非のといふことに關するな。
 心は十年も記憶する、識は分別する、念はおもふ、想観は心の上の神識だ、つまり心に思ふことは止める、イヤ、佛にならうとも思ふな、佛にならうとする目的があるから可かぬ、成佛せんとする信心ある奴は凡俗となり墮獄することはないが、矢張り迷の一つだ、佛になりて何うするか、須彌の上で一杯飯食されて居てはたまらぬ、蓮花の上は危い、眠つて居た方が好いと思ふが佛になつて此の世に出たら日本佛なら外國に欺かれぬやうになるだらう、外國佛なら日本を取らうとするだらう、佛は氣樂な隱居と思ふな、佛になつて何うするか、併し今日は佛にならうと思ふものはないから御開山の心配は御無用だ、作佛を圖るな。
 坐禪は坐臥の坐てはない、坐す、臥す、行す、住す、是れは四威儀といふて人に免れざるところ、此の坐禪は比の四威儀の一分てはない、百姓の胡坐も坐だ、立て膝も坐だ、坐だの臥だのにかゝはらぬ、故に行亦禪、坐亦禪、語默動靜體安然といふ、歩るさながらも悟れるし、寒くして炬燵の中で悟つたものもあるし、跋陀婆羅菩薩は湯の中で悟り、盤山の寶積禪師は魚屋の那箇不精底といふ一言に悟つた、故に悟りは坐禪にクッ付いて居

るものでなく、坐禪から悟りが出て來るものでもない。

○達磨教二祖云、外息諸緣、內心無喘、心如牆壁、可以入道。

○又慧可云、我已息諸緣、師曰、莫不成斷滅去否、(略文)可曰、了了常知、故言之不可及、師曰、此是諸佛所傳、心體更勿疑也。

○保壽沼僧問、萬境來侵時如何、師云、莫管他。

○輔行二曰、對境覺知異、木石名爲心、次心籌量名爲意、了了別知爲識。

○洞山云、須知有佛向上事、僧問、如何是佛向上事、師云、非佛。

○又南嶽磨埵作鏡話。

○雲岩云、以無爲爲座、潞山師云、以諸法空爲座、道吾坐也、聽伊坐臥也、聽伊臥有一人不坐、不臥、速道、速道、此三師商量四儀離、即超越。

○大論九十九問曰、爲法故何以不應坐臥、答曰、無是空法、此人大欲大精進、恭敬法、故自作是念、我若坐臥、則是懶惰、我初求法、時身尚不惜、何況疲倦、是故不坐臥、大欲精進、與坐臥相違、故又坐臥、則不勤力、行立、則勤力、精進、是故常住二威儀、以待師出、これ此れは行立を以て勤力となす也、薩陀婆崙菩薩の行の問答なり。

○豈拘坐臥乎とは、坐は行住坐臥の四威儀の坐にはかゝはらざる也、然れども佛佛法爾として結跏趺坐あり、故に此の坐を離れて佛祖の三昧あらず、況んや回光返照の功夫に至ては脱然として坐臥に拘繫せらるるものにあらず、故に不離坐、不即坐、所謂不即不離非思量の行履也。

○六祖云道由心悟、豈在坐也、經曰若如來者坐若臥、是行邪道、○不能語云、夫參禪以下至拘坐臥乎之段、是則三世十方佛祖同道之坐禪儀則辨道用心。

尋常坐處厚敷坐物、上用蒲團、或結跏趺坐、或半跏趺坐、謂結跏

以下至要術也、示不離不即之坐相

結跏趺坐ハ佛坐、蒲團徑一尺二寸、周圍三尺六寸、自跏趺半、後至脊骨下、是佛祖坐法也。

趺坐、先以右足安左脛上、左足安右脛上、半跏趺坐、但以左足壓右脛矣、寬繫衣帶、可令齊整、次右手安左足上、左掌安右掌上、兩大拇指面相拄矣、乃正身端坐、不得左側右傾、前躬後仰、要令耳與肩對、鼻與臍對、舌掛上腭、唇齒相著、目須常開、鼻息微通、身相

出入息、凡入息細有、四段、曰ク風

既調欠氣一息、左右搖振、兀坐定、思量箇、不思量底、不思量底、如何思量、非思量是、乃坐禪之要術也。

(ヲトアル)曰ク喘(ノドナル)曰ク氣(アレシル)曰ク息(アレシラズ)

上來述べたごとく、坐臥行住には拘らぬが然れども坐禪が一番親しいと、然の字を入れて見よ、是れから坐法を説く。

印度は石疊が板間ゆえ厚い坐物を敷く、圓い蒲團は尻だけあたれば好い、石の上や板間で日本のやうに疊でないから坐物を敷く、坐禪するは年取つてからは可かぬ、爾ういふものは半跏が好い、半跏も代り番て好い、慣れて来るとたいへん樂て好い、老僧は坐禪して居ると退屈せぬが膝を折りて坐をさせられてはたまらぬ、一つは癖になるだ、餘り帯をひどく締めるは可かぬ、尻の下になるところが一番大事だから衣服杯のかたまりが一寸もないやうにせよ、御開山は眞言天台の作法は言はぬ、純粹の坐禪だ、榮西様は顯密を兼ねた、此の手の組みやうは法界定印だ、佛は右の手が上だ、菩薩は左の手が上だから降魔の印相だ、俺し等の印相は菩薩と同じく降魔に屬して左の手が上

ぢや、正身端坐悟が自ら其中にある、有の見も可かぬ、無の見も可かぬ、正身端坐して一寸も動かぬ、素首を斬ると言はれても動着せぬやうにならねば、真正でない、坐禪の腹が動かぬやうになれば、行住坐臥坐禪となる、不思議、不思議、佛となる、了簡もなく、死ぬときは自若として死ぬやうにならねば、眞の修行でない、首を斬るを勝手にお斬りなさいと言へるやうでなければ、駄目だ、グ、ン、ニ、ヤ、リ、したり、窮屈に反つたりしては、坐禪にはならぬ、力身でも可かぬ、趙州の無、無、無と脊梁骨を衝つ立て、力身でも可かぬ、此れは坐禪にのぼせて居るので、惰弱に、グ、ン、ニ、ヤ、リ、は氣が引き立たぬからだ、全體心頭が坐相の上に現れて居る故に、坐相を見て、坐禪に身が這入つたか、坐禪が手に入らぬかといふことが能く知れる、天童様が御開山の坐相を譽められたことがある、故に坐禪の形相を見て、其の形相が正身端坐になつて居るか、正身端坐になつて居らぬかを見れば、坐禪人の胸中が恰も掌紋を見ることがよく明白に見透すことが出来る、ぢや、舌が上脛に著く、是れは屹度著く、無理に著けずとも自然に著く、文章に書くと八釜敷いが斯う坐れば、此の通りに往く、茲は坐相を言ふところ、故書かねばならぬから、書くが、全體舌は長いから、上のア、ゴに屹度著く、目は常の通り開く、書に書いた達磨のやうに、ハ、タ

げてない、又た開かぬと眠氣を催す、坐禪を仕付けぬものは口を塞ぐと鼻許りて息が出来ぬ、慣れたものは自分の息が分らぬ位になる、唾は飲み込んでも、好いが痰は飲み込んで、は可かぬ、唾を吐くは精氣をつからすから吐いては可かぬ、唾を飲めば身を潤す、弱つた時、息を出せば、身をつからす、ス、イ、ッ、と息を飲み込む、茲には一息とあるが、二、三度までは好い、元は木なき山の突つ立つた貌、不思議底の思量が困つたことだ、思量にあらざるものを思量せよと言ふのだ、から文字の上には、講釋は出来ぬ、例せば金を借りて往く、何うてせう不承知だらうが、其處を一つ承知してといふ鹽梅で、たとひ願ふとも決して出来得べからざることを承知する様な語調だ、法は不思議な物だ、思量で出来るなら、誰も悟れるぢや、そんなら身心脱落とも言はれぬ、不思議、不思議と言ふ時、何うしたものだ、思量分別を抛ちて、善惡邪正迷悟凡聖我佗彼此を離れたものを思量するぢや、思量の及ばざるものを思量する、思量と不思議と合體するとき始めて、今までの思量が脱然として離れて仕舞ふ、千辛萬苦幾度か蒼龍窟に下りて無益の修行をしたが無益なることを知れば、那人と相見が出来、何も面倒ではない、智慧の及ばぬことゆえ、合點が出来ぬまで、ぢや、思量の出来るを思量するは通常だ、思量が出来

ぬからとて打ち捨て、置くは此れも出来るだらう、思量にあづからざるものを思量するところに思量が倒れ、不思議が不思議でなくなるから出身の活路を得る即ち活佛だ、水と火と合するとき用をなす、合はぬものと合ふところに作用を生じ、同せずして同ずるところに味を生ず、家内中酒好き花見好きでは家は保たぬ、見つともない止しなさい、ウム、爾うだなあと言ふところから家が治るのだ、此の四大の仲の悪いものが和合するところに身體が活動する、不思議を思量するところて修行になるぢや、お話することの出来るだけ道理は話すが其れから以上は自分で得るが好い、僧問、蜀州西禪師、曹山法嗣、如何是非思量處、云、誰見虛空、夜點頭、信心銘曰、虛明自照、不勞心力、非思量處、識情難測、佛境界經曰、文殊言、世尊、無爲者是何境界、佛言、無爲者非思量境界、文殊言、非思量境界者、是佛境界、何以故、非思量境界中、無有文字、無文字故、無所辯說、無所辯說故、絕諸言論、絕諸言論者、是佛境界也、斯う言ふてある好い證據だ、不思議を思量する、是れは本と藥山様の語だ、

非思量手輕るな答辯だ、全體思量でない、思量を離れたものだ、一切天地間のものは不可思議不可稱量思量分別を離れて居る世間で能く發明發明といふが、其の理の出づ

る處發する處は分らぬ、皆な思量の外に活動して居る、即ち非思量だ、ちつくるめてお前の思量して居る思量も非思量だ、思量の分別を超越して思量の外に居る、自然に脱落して居る、本來の面目を合點して見るときは、決して思量分別に墮せぬ、發明の何のと言ふも畢竟天地にあるべき道理より外はない、其天地間の道理が元來思量を超越して居て思量の及ぶところでないところが思量は、人人具足して居るから思量することは好いが、全體思量外にあるぢや、此の境界が手に入れば坐禪の要術だ、此の非思量の境界に至らねば脱落の境界は得られぬ、本來無一物の境界は得られぬ、一念不生全體現は得られぬ、皆一つことだ、大抵修得底の智慧や學得底の藝に縛せられ、自分の悟より外に好い悟はないと悟に縛せられ、禪者は禪に縛せられ、教者は教に縛せらる、此の繫縛を去るが修行だ、其の繫縛の取れたのが身心脱落だ、向上の境界を得ると言ふも茲の事だ、之れを心經には、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、と言ふた、一切皆空の天眼鏡で見ると微塵も恐怖するところはない、百萬年先きを見る眼あれば一寸も恐るるところはない、畢竟恐るゝは向ふが見透せぬから恐怖するので、恐怖するは罣礙あるゆえ、罣礙あるは内外表裏迷悟凡聖あるからだ、内外表裏迷悟凡聖

あるは般若の智慧が明ならざるゆえぢや、故に一切の顛倒を越え一切の罣碍を離れ一切の恐怖を脱せんとならば無上正徧智の佛果を得るより外はない、つまり思量箇不思議底、不思議底如何思量、非思量の三句が坐禪の要術ぢや、此の非思量の非は超越を意味するので否定の義に見るてな。

○坐法有種種、今降魔坐也、佛陀婆利三藏、修禪要訣、出、可見、辨惑指南、云、禪家坐法非也、是局說也、『消伏毒害經』、『聖觀音經』、『手手儀軌』、『十一面儀軌』等出、皆以左爲上之坐法也。

○『王三昧卷』にはく、慈然として盡界を超越して佛祖の屋裡に大尊貴生なるは結跏趺坐なり、外道魔黨の頂額を踏翻して佛祖の堂奥に箇中人なることは結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するはたゞこの一法なり、又云、あきらかにしりぬ、結跏趺坐これ三昧王三昧なり、これ證入なり、一切の三昧はこの王三昧の眷屬なり、又云、初祖菩提達磨尊者西來のはしめより嵩嶽少室峯少林寺にして面壁跏趺坐禪のあひだ九白を經歷せり、それより頂額眼睛いまに震且國に遍界せり、初祖の命脈たゞ結跏趺坐のみなり、初祖西來よりさきは東土の衆生いまたかつて結跏趺坐をしらざりき、祖師西來よりのちこれをしりぬ、『坐禪儀』にはく、西天東地に佛法つたはるるといふは坐禪の

つたはるるなり、それ要機なるによりてなり、佛法つたはれざるには坐禪つたはれず、嫡嫡相承せるはこの坐禪の宗旨のみなり。

○佛祖正傳唯坐禪のみ迷悟にあつからざる事しるべし、又云、佛言見、書、跏趺、魔王亦驚怖、これ降魔の祖意みへたり。

『釋迦譜』卷三日、釋提桓因化爲凡人、執淨輦草、菩薩問、云、汝名何等、答名吉祥、菩薩問、之心大歡喜、我破不吉、以爲吉祥、菩薩又云、汝手中草此可得、不於是吉祥、即便授草、以與菩薩、因發願言、菩薩道成、願先度我、菩薩受已、敷以爲座、於草上結跏趺坐云々。

○兩、大、拇、指、面、相、拄、即、法、界、定、印、也、瑩、山、三、根、坐、禪、說、云、足、結、佛、地、不、入、惡、處、手、結、定、印、不、取、經、卷。

○『寶慶記』云、安心於左掌上、乃佛祖正傳之法也。

○身心一如のゆへに正身は正心なり、身の左右前後に傾かざるは心の四句に墮せぬと同じ、心非思量の時身も非思量なり、身の非思量と云は正身端坐なり。

○兀々地は、『坐禪箴』云、兀兀地は佛量にあらず、法量にあらず、悟量にあらず、念量にあらず、○藥山云云、本則頌云、非思量、處、絕、思、量、切、忌、將、立、喚、作、黃、剝、地、識、情、俱、裂、破、鑊、湯、爐、炭、也、清涼

○非思量佛境界經「謂文殊言世尊無爲者是何境界佛言無爲者非思量境界文殊言非思量境界者是佛境界何以故非思量境界中無有文字無文字故無所辯說無所辯說故絕諸言論絕諸言論者是佛境界也」と宏智の『坐禪箴』に「佛佛要機とあるは佛境界を云ふなり、委はれるなり、それ要機なるによりてなり（坐禪は即ち非思量なり、佛境界なり）」

○『不能語』云「今我身心同契万象万象起滅齊會我禪是故坐禪者盡法界定理爲諸法不異之根基矣故宜以容儀用心皆定于中也如彼求悟蕩迷明空有達理事見源派分究竟性相之本末則此中之分用不以爲全體焉」

○『開解』云「此一段は全く藥山の公案を用ひらるこの問答を參熟して要術を究明すべし思量底を思量するは有心なり要術にそむく不思量底を不思量するは無心なり要術にそむく今は不思量底を思量すゆへに思量底を不思量すこゝを非思量と謂ふ此境界を正傳の慧命とす（中略）回光返照の退歩なり」

所謂坐禪非習禪也唯是安樂之法門也究盡菩提之修證也公

承上示正傳坐非習禪並示坐禪德用

一切動用ヲ離ルハ安ナリ
一心ノ慮知念覺ヲ離ルハ樂ナリ

ラシキハメテ殘リナキヲ云
非前修後證一修

證不二也辨道語參考

一切知見解會ニト
リコメラレズナリ

案現成羅籠未到若得此意如龍得水似虎靠山當知正法自現

上ノ譬
公案現成羅籠未到ノ意

倚也「ヨル」ト訓ス

法華云是法非思
量分別所不能解
前ノ本來ノ面目
公案現成

山房夜話參考

魚ヲトル

會得如龍虎得山水

法華提婆品
文殊曰非口所可宣

非思量ノ境界實思
絶スル處

前昏散先撲落（上は坐中功德）

拂著ナリ又擊也
ハツタトヲトスナリ、ハツタトヲチタナリ

習禪の癖が止まぬ南山の道宣が初祖を習禪部に入れたは佛祖單傳の坐禪を知らぬからぢや坐禪は佛祖の居室だ居室だから坐禪を離れた佛祖はない坐禪は日間費ひと言ふは間違ひだ決して日間費ひてはない煩惱妄想を取つて除けるはなかなか容易な修行ではない此の修行は坐禪より外にないから坐禪は日間費ひてはない有相の修行有相の稽古はするが無相無爲の修行は誰もせぬ世間で切腹を譽めるが無相なる妄想の首を斬つて落し煩惱の腹を切るは餘程英雄だ故に英雄豪傑でなければ

禪宗坊主にはなれぬ、拔山蓋世の氣力ありし楚の項羽も末路には虞兮虞兮と哀れつ
ぼい愚痴を言つたてはないか、一刀を振り劈して百萬の大敵に斬り込む勇氣がなけ
れば坐禪は出来ぬ、坐禪は佛祖の三昧王三昧て坐禪せぬ佛祖は一人もない、坐禪は佛
祖の三昧王三昧たることを知らぬから習禪杯といふて正法輪を謗するぢや。

其坐禪は坐禪ぎりぢや、稱名念佛も入らぬ、題目を唱ふるにも及ばぬ、結跏でも好い、足
が痛くば半跏でも好い、只だ脊梁骨をポツ立て、兩手に法界定印を結び、ドツカと坐
れば一顆の明珠は轟然として盡界を超越して太尊貴生の光明を放つ、是れ程安樂な
法門はあるまい、放捨諸緣、休息萬事、莫管是非、停心意識之運轉、止念想觀之測量、莫圖作
佛の講義を聴き、恐怖氣が付て五濁惡世の我れ等ごとき素凡夫の爲し得ることとな
いと引つ込み思案をなすは未だ嘗て坐つた事のないものが、坐禪の外に居て坐禪を
見た考ぢや、坐禪はそんな小六ヶ敷い事でない、理窟言はずに、マ、坐つて見よ、大安樂
の法門が眞に其所に現成するぢや、〇それから次下の菩提といふは道本圓通の道の
梵語て、佛道の事、餘ることなく欠けることなく、法界一圓相なるは坐禪だ、法界大總相
法門とは此の坐禪のことだ、修も證も坐禪の上の功德だ、佛道の活潑潑だ、佛道と坐禪

とは兩彩一賽だ、坐するところに菩提道を成就して佛祖と雖も偏を奈何ともするこ
と能はざるのみならず、立地に偏の說法を聴き、及び蠢動含靈も無始劫來の業累を解
脱して心地を開明し、草木國土墻壁瓦礫までが此の大功德を讃歎して我れも知らず
他も知らざれども佛祖の大道遺憾なく其の中に行はる、故に究盡菩提之修證也とい
ふぢや、冒頭の道本圓通、假修證といふは道の上より説き、此所の究盡菩提之修證也
は坐禪の上より説く、文字の上からは矛盾あるやうに見ゆるけれども、各各指すとこ
ろがあるから矛盾ではない。〇公案とは公府の案牘の切り文字て政府の法律といふ
ことぢや、政府の法律は一度發表した以上は變改することはならぬ、佛法も亦た其の
通りぢや、現はありのまゝといふこと、成は成就の意にて現成とはありのまゝに成就
して居ることぢや、眼は横に鼻は豎に水は濕ひ地は堅固、修行あり涅槃あり煩惱に引
つ込まれるは迷となり、菩提を成就すれば悟ぢや、生三昧死三昧、諸佛也、全機現衆生也、
全機現味すこと得ず移すこと得ず、根根塵塵面目堂堂、刹刹法法、眼睛突出、羅籠なきに
あらず、早く空劫以前の修證を透脱し、魚鳥なきにあらず、已に朕兆以前の公案を現成
して全體迥に塵埃を出て居るのぢや、未をナシと讀むから未到を到るなしと讀むが

好いと言ふものあれとも強ち爾う見ずとも好い未だ到らずといふても後ちに到るといふこととてない未到が眞面目ゆえどこまでも未到だ、公案現成の時には煩惱は寄り付けぬ、寄り付けぬてはない煩惱はないのぢや、羅籠は煩惱のことだ、魚が羅といふてあみに引つ掛り鳥が籠に居るときは自由の利かぬと同じく、愛着煩惱に引つ掛れば自由が利かぬから煩惱を羅籠といふた、此の意を合點すれば龍の水を得た如く自由だ、虎が山に遊戯する如く人境相應して自由だ、今日教相文字が出来た上に悟があれば好いが教相文字を知らず悟ばかりなれば大臣宰相が裸體で出たやうなものだ、故に二つとも必用て其の時正法が現前するぢや、下手をすると裸體の大臣となる、其れは邪法だ、〇坐禪して居る時茫として只だ睡くなるを昏沈といふ斯うして居てもいろいろの事に心が散る之れを散亂といふ、散亂が止めば昏沈する、昏沈が止めば散亂が来る、此の二つを脱することはなかなか六ヶ敷い、此節は便利のため多事になり、多事のために心中忙殺せられ、草臥れると昏沈して睡る、昏沈散亂を離れたところに坐禪の功德が現ずるのを昏散先撲落と言ふ、撲落は打ち落すことだ。

〇道宣著『續高僧傳』達磨入習禪篇故覺範『林間錄』破之〇『辨道話』云、六度の中の禪度に

あらず三學の中の定にあらず、諸佛の自受用三昧とあるが教師論師の習禪とは天地懸隔よ。

〇宗門の坐も初め坐法氣息のをさめかた等は習禪のやうなり。

〇安樂天台釋此品有依事附文法門三事者身無危難故安心無憂惱故樂身安心樂故能

進行附文者住忍辱地故身安而不卒暴故心樂觀諸法實相故行進法門者安名不動樂名無受行名無行。

〇眞記私曰私云身心安樂而觀涅槃故名安樂故異世善也。

釋事明圓法華要解五一出。

〇身配安心配樂。

〇究竟佛慧了不輕品

〇令其堅固阿耨多羅三藐三菩提方便品

〇『用心記』云常住大慈大悲坐禪無量功德回向一切衆生莫生憍慢我慢法慢此是外道凡夫法也、念誓斷煩惱誓證菩提只管打坐一切不爲是參禪要術也、月云夫志于此者如初發心須臾不可忘斷惑證道故云誓。

○菩提者不謂所得果位矣。十二時自有不犯處。渠無國土。我有破蒲團。如斯公案現成無羅籠之相障。是謂龍虎得山水也。不能語

○維摩經四卷ニ末丁生注曰。菩提者彼語有之。此無名也。實體極居終智慧也。然有三品。聲聞也。辟支也。佛也。二乘各々於其道爲菩提耳。非所謂菩提也。唯佛菩提爲無上正徧菩提也。

修證廣錄云。所謂佛家爲體者。宗說行一等也。一如也。宗者證也。說者教也。行者修也。向來共存學習也。應知行者行於宗說也。說者說宗行也。宗者證說行也。行者不行說不行證何云行。

佛法說若不說行不說證難稱說佛法證若不證行不證說爭名證佛法當知佛法者初中後一也。初中後善也。初中後無也。初中後空也。這一段事未是人之強爲。本自法之云爲也。宋元明以來初迷後悟。初大疑後大悟等。非佛祖正傳三昧也。

○公案以下の八字承上安樂法門究盡菩提云也。公案トハアリアイ隠レハセデソコニアルヲト云フホドノ意

○未到の未は未歎論語憲問果哉未之難註未無也と注せり。

○面山師曰未は未歎と。
○未たは後に對して云ふことに似たる故に現成公案の的處に親からず幸ひに俗書の例を出すこれ博達の故に云はるゝなれどもやはり未たてよしその例多し先づ諸

惡莫作の莫は誠めの言ばにあらず莫妄想の莫のことしと。

○『不能語』は注に無の字の意に解してなんともしはせず最も可然『正法眼藏阿羅漢卷』に「無復煩惱は未生煩惱なり」とこれ無を却て未となす此の意は無の字はありけるものを無くしたやうにある故に元來未生なる煩惱と蓋し然るべし。

○或注に不生なりと云ふこれも未だと云へば後に生ずるの義あるを恐れてなり又た云煩惱は自體不生なものと云ふ。

○然るに邪解の人あり羅籠未到と云は全く未だの義と爲し兀坐の端的ばかりは羅籠いたらざるのみ等覺以還誰れか羅籠なからんやと云ふと嗟乎愚なるかな坐禪をしらず現成公案をしらず非思量の境界をしらざることを煩惱のことは『正法眼藏海印三昧』に云く客塵にあらざるがゆへに不染汚なりと云はるゝことよくよく考へみるべし。

○未到は畢竟超越有到無到也。

○肇論新疏卷下注無名論至能拔玄根於未始即群動以靜心恬淡淵默妙契自然註未始三意一未猶無也理無始故智始會時非照合有二智雖極真未始照故如前云虛心等。

○羅籠未到の未の字教授戒文の第五不酤酒戒の文、未將來莫教侵と此文の未字の意と同じ、いよ／＼知る、ナシと訓するに及ばざるを。

○正法猶云妙法正有妙義
正法華妙法華ノ意ヲミヨ

○昏無想天より四空處。

○散欲界禪。

○四禪天中道四根本。

○昏散撲落處自超越三界。

○『信心銘』繫念乖真昏沈不好なりとある。

○等覺に羅縠を斷じて妙覺に入ると、此處難解等覺の位にて斷すれば等覺即妙覺也、妙覺に入れて斷するといはゞ無明残りても妙覺に入るとなるなり○これは水清は月現する清むと現ずると一時なり實無間斷なり。

○止の時即觀なり。

○身心脫落すれば面目自現前昏散撲落すれば正法自現前なり、『法華經』に既知是息已引入於佛慧。

○見三乘與一車化城ノコトモ同シ

○『壽量品』示涅槃死佗國云久遠實成ノコト

○『壽量品』云其父聞子悉已得差尋便來歸咸使見之、註水澄月現亦何去來。

○鏡をみかければ光り自ら生ずみがいて後ち光りが別に外より來る心地するは迷ひなり、水清めは影自ら現ず清みて後別に影をうつすの功を具ふるとをもほは迷なり高祖の垂示に、放捨諸緣休息萬事、乃至莫圖作佛の言をきいて、その上に別のことあるかともふ、先づ試みに一切を放下して作佛をもはからざる處まで修してみよ、外に求むべきものありや、唯今日の言語文字を解して實地をふまざるかゆへにかくをもふなり、故に兀地被礙と云ふとき唯兀地さりなり、思量も分別も作佛も千里萬里なり、達祖言外息諸緣、内心無喘、心如牆壁、可以入道、これも別に入道の處ありと云ふ人あれども、敢て左にはあらず、心如牆壁の處肝要なり、しかれども枯木死灰の如くともふは迷なり、了了常知、虛明自照、不對緣而照のゆへに、全止のとき全觀あらはる、この道理、眞參實窮せよ、珍重。

若從坐起徐徐動身安詳而起不應卒暴

「一、起坐ノ用心」

「一、安樂品云柔和善順而不卒暴」

坐するときは麤より細に至り、起つときは始め徐徐とゆるやかにして細より麤に至る、是れ自然の作法ならん、坐すると足もしびれ血も滞るから跏趺を崩していきなりひよつと起つと引つかへることがある、故に徐徐とせねばならぬ、徐徐動身安詳而起つべし、渾べてが柔順が好い、卒暴では可かぬ。

以下示坐禪妙用非分、及不能語云、以下世之未信此道者或言思而無益矣、默而無聞不如此問學、焉今爲此等人而言之

嘗觀超凡越聖坐脫立亡一任此力矣。况復拈指竿針錐之轉機。

「六凡」

「元非思量ノ境ナルニヘ、四祖、五祖、六祖ハ安坐シテ遊ル」

「石頭黃檗、德山、臨濟」

「法華方便品云是法非思量分別之所能解」

「神通卷并ニ他心通卷、小神通」

舉拂拳棒喝之證契。未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也。可爲聲色之外威儀。那非知見之前規則者歟。

內知見解會思量ノ分際ヲ超越ス故ニ知見以前非思量ノ境界也

是れから坐禪の功德を述べ、六凡四聖で十界を盡す、坐禪は能く其の六凡四聖を超越する、佛をも超越して居る佛を超越すると言へば、オツクウに思ふ、てんでに生佛不二とは言ふが、凡を越へ聖を越ると云ふは可笑しい、爾う云ふ法はあるまいと思ふが爾うでない、修行は佛地を躡踏せねばならぬ、佛になりたいと思へば安心は出来ぬ、佛にも用がなく、凡夫にも居らぬ善悪邪正をも離れねば、病は取れぬ、佛の一字も心田の汚れだ、凡夫地に安ずれば、三毒のために安心は出来ぬ、佛は佛になりたいと思ふて、修行したから、佛になつたが、さて佛になつて見れば、佛にも用はない、今日のものも博士になつたい、といふて勉強し、其の結果美事博士になつたところで、博士病を持つて居ては人間の交際が出来ぬ、故に凡も聖も超越せねば、安心は出来ぬ、其の凡を越え聖を越え、大安心を得たところから坐脫立亡も出来る、四祖や五祖が其れだ、玄透禪師に隨身した或る老僧が廿四日に自分で手紙を書き、廿五日に壘を替へ、香を焚き、臨終用心記を書き、袈裟を搭け、廿六日朝は遺偈を作り、世俗の如き末後の水は無用なりとて前日入浴して身を潔め、手を着けるなど言はれて、観音十大願を讀みながら遷化された、死後も顔色が變らぬ、涎も垂さず、随分歴歴だ、坐脫の人だ、死ぬ時無理に坐禪した人

もあるがそんな事は無用だ、三祖は樹下に立亡した、日本でも風外和尚が遠州の金刺で百姓を頼みて穴を堀らせ、其の中に立つたなりに往生した、是れが立亡だ、ながく人に測られざる修行を積んだものでなければ出来ぬ、學問して理窟を言ふ位では逆も出来るものでない、自分の心が分別意識に使はれぬ修行を積みねば出来ぬこと、偏に坐禪の力によるぢや、俱胝和尚は吾れ天龍一指頭の禪を得て生涯受用不盡と言はれ人を接得するに常に一指頭を立てた、或時和尚の留守に雲水が来て法問したれば小僧が出て和尚を真似て一指を立てた、和尚が飯院して其の事を聴き小僧の指を截つた、小僧がたまらず逃げ出すところを後から小僧と喚び掛ると小僧が振り返りざま臍落ちがして悟つた、僧あり南泉に百尺竿頭如何が歩を進めんと問ひければ、泉が更に一步を進めよと答へられた、又迦葉尊者が阿難様に門前の刹竿を倒却せよと言はれ、阿難様が言下に大悟したこともある、洞山大師は神山の僧密が把針して居るを見て把針の事作麼生と問はれた、密曰く針針相似たりと、鎚は槌と同じだ、迦葉様が白槌して文殊が一夏に三處に安居せしを擲出した、石頭が青原に參した、原曰く何處から來た、頭曰く、曹溪から參りました、そこで青原が拂子を立てた、黄檗が或日拳を捏

つて天下の老和尚、總に這裏にありと言はれた、徳山の棒臨濟の喝、是れは誰れも知らぬものはない、坐脱立亡は言ふに及ばず、拈指竿針鎚之轉機も、擧拂拳棒喝之證契も、一に打坐の方により非思量の境界ぢやから思量分別や神通修證の手は、届かぬ、故に思量の思ひ量り分別で理窟言ふても追つかぬ、其の思量を離れた處を合點せねば駄目だ、分別思量を離れた時に妙處がある、何でも手引は必要だが手引を離れて合點するところがなければならぬ、其れを轉機と云ひ、證契といふ、是れは自分で會得し自分で合點せねばならぬ、ところが其處に至ると思量分別の行き詰つた處で思量分別を離れた處を得るぢや、併し思量を止めては却つて至ることが出来ぬ、全體此處は思量分別に與らぬ底の人が、思量分別に與らぬ底の境界を言ふたのであるから、修行中の人は十分に思量分別せねばならぬ、思量もせず分別もせず茫然として居てなか／＼往けるもので無い、思量分別外に身を轉した人が其の合點したことを示したのであるから斯う言ふので、今日の人は思量分別の盡きるまで行らねば分別思量外の事を合點することは出来ぬ、特に思量分別で可かぬのみならず、神通でも駄目だ、昔黄檗が天台に赴かんとする時途中で一僧に逢ひ話しながら往くと、谷川が俄に漲つて、立つて

視つめて居ると、其の僧が一所に渡らうと言ふから黄檗に渡りたくば、前一人渡れと言ふと、其の僧衣を褰げて波を躡むこと平地を行くがごとく向ふの岸に着いて黄檗を招いた、黄檗拔からず、咄、この自了漢吾れ早く知らば汝が脛を斫るべかりしをと言ふと、其僧歎じて、大乘の法器なりと言ふて見えなくなつた、仰山は一日忽ち異僧が虚空に乘じ來り面前に立つを見て、近ごろ何處を立つて來たかと問ひけるに、今朝天竺を立ちました、何と遅いことではないかと語ると、ハ、遊山翫水して居ましたと答へた、そこで仰山が神用は閻梨にないことはないが、佛法は老僧に還せと言ふと、其の異僧が殊更に支那に來つて文殊を禮拜せんとせしに却て小釋迦牟尼佛に逢つたと讚歎した、今日でも黄檗や仰山と問答した異僧の如く神通を得られぬ事はないが、達磨三朝傳に大乘の佛法が盛になつてから修行の仕方が絶えたとある、御一新になり人智の進むに従ひいろ／＼な可笑しな事がなくなると同じく大乘の佛法の弘通すると同時に神通を得る修行も絶えたであらう、其れは兎も角も黄檗に見ても仰山に見ても異僧達の神通を以てするも、非思量の境界は寄つても付けぬことが解るぢや、特に神通ばかりでない、修證に至つても爾うぢや、修は修行の事、證は悟のことだ、

非思量の境界は修行して證入するけれども却て修證の邊には居らぬ、修證の邊に居る間は、熟したとは言はれぬ、熟したときは修證に染汚されるものでない、其の範圍を超越せねばならぬ、其の超越した境界を、却て修證で窺はんとするのだから到底往けるものでない、此の境界は迥に六塵の境を超出して居るから聲色之外、威儀だ、聲色は六塵の代表だ、六塵の境でもなく、六識でもない、然るを六根に對するものを以て合點せんとする、到底不可能の事だ、其れのみならず、知見之前規則で知見ても及ばぬ、知見とは思量分別、思量分別で合點するものは皆な煩惱妄想で煩惱妄想を以て煩惱妄想を超出した境界を窺はんとするも是れ亦た出来る筈がない、已に六塵が寄り付くことが出来ぬとすれば聲色之外威儀なること知るべく、煩惱妄想を以て窺はれぬとすれば、知見の前の規則なること明白ぢや、此一段は冒頭の道本圓道、爭假修證、宗乘自在、何費功夫、況乎全體迥出塵埃兮、執信拂拭之手段といふ一段を重ねて説いたやうで、坐禪の不染汚なることが成程と合點出来るな、那非知見之前規則者歟、とは、知見の前の規則でないものはない、規則であらうがないといふ反語だ。

○指、不如密多、並俱胝等。

○竿南泉百尺竿頭如何進步師云更進一步○夾山竿頭絲線任君弄○阿難倒却刹竿等
 ○針神山僧密把針時洞山問答○又有鍼字義
 ○鏡同槌世尊陞座文殊白槌○文殊三處安居迦葉撥槌等○皆是情識外之轉機
 ○黃檗遊天台時異僧歎曰真大乘法器我所不及言訖不見○仰山一日異僧乘虛來早晨
 離西天仰山曰神通妙用則不無闍梨佛法須還老僧僧云特來東土禮文殊却遇小釋迦
 ○香嚴偈云處處無蹤迹聲色外威儀
 ○楞嚴云知見立知即無明本知見無見斯即涅槃

承非神通修證所及

此段ハ全ク普勸ノ意ナリ

然則不論上智下愚莫簡利人鈍者專一功夫正是辨道修證自

一證ニ當ル一六祖ト南嶽ノ話

不染汚越向更是平常者也

一修證兩段ナラサルカニ

平常二字身心學道ノ卷ヲミヨ、如上所云不染汚修證故無險難亦一尋常也

神通でも修證でも可かぬけれども上智で往けるももなくさりとて下愚のものにも往けぬことは無い、是れは必ず往けます、正直に思量分別を離れ煩惱妄想を離れ捨

つべきものを捨て、断すべきものを断じ、正直に修行すれば往ける、放捨諸縁休息万事が肝要だ、哲學の主義でも可かぬ、窮理學でも可かぬ、信解行證で信が根本だ、信する所より解領が出来る、解領が出来れば行ずる、行ずる所より坐脱立亡も合點が往き、身心に泌み込み、三祖の如く首を持つて来いと言はれて畑で廉く買った大根を切る如くピクともせぬ、其れは皆な信するところより来り、上智でも往けぬが、下愚でも出来るぢや、大論八十に世尊是門利根菩薩摩訶薩能入佛言鈍根菩薩亦可入是門是門無礙若菩薩摩訶薩一心學者皆入是門とあり、又た圓覺經には若遇如來無上菩提正修路根無大小皆成佛果とある、御開山は辨道話に、志のありなしによるべし、身の在家出家にかゝにはらずと仰せられた、十六羅漢中の周利槃特は至極愚鈍の質にて、一四句偈さへ容易に覚えられなかつた人なれども、刻苦の末羅漢果を得た、志のありなしにより正直に深く志すとろあれば、必ず道に入るぢや、吾が心で吾が身に得ることゆへ一言で澤山だ、南嶽は什麼物、恁麼來と言はれて、八年參究の功を積み六祖の法を嗣き弟子となつた、什麼物だらうと深く考へたら、自分でも知れぬ、名は假名で什麼物だらうと、南嶽が八年考へた、只だ正直に參究したから、悟ることが出来た、説似一物即不中と悟

つた故、上智下愚を論せず、馬鹿でも利口でも好い、鈍物でも好い、只だ專一に功夫せよ、功夫も鹽梅がある、今は功の字を工の字に書き、工夫と綴り、タクムコトと思ふが、矢張り功德の功の字が好い、精出して撓まず倦まぬことを功夫といふ、刻苦し骨折りて坐禪するを功夫といふ、功夫するところに必ず合點が往く、修證不染汚、六祖が修行證入は要るかと問ひけるに、南岳が修行證入はあるが、合點したところは修行證入に與らぬと答へた、若い時に辛苦して修行したことを忘れ切れぬは、修行に染汚されて居るものだ、又趙州の無を悟つた一鐵破三關を透つた杯と領悟に誇るは、是れも染汚、修行にも證入にも染汚されず、そんなものは、トンと入りませぬ、悟杯といふ不調法致した覺え更に無之候と斯う往かねば駄目だ、そこに往くは面倒でない、今日は理窟へて、わざと六ヶ敷くする、イヤ哲學、イヤ窮理學と、古道具屋へ買ひ物に往つたやうに、是れ彼れと面倒だ、只正師に聞く所を、正直に修行すれば、面倒でない、食すべき時に食し、臥すべき時に臥し、往くべきに往き、行くべからざるに往かず、平常心是道、是れが不染汚の境界だ、僧侶なれば寺に居りて磬子を叩き坐禪して坊主に安心して居るが好い、食べられなくなれば餓死するが好い、息が切れたら同時に念も引つ切るが好い、念

を殘して萬一幽靈にてもなれば、尙ほ人に厭やがられるからな、天地の法に面倒は無、凡夫が不實を飾りて信實らしくし、無學の癖に學者振りて、わざ／＼面倒にして、とら／＼悟れぬやうにするぢや、只だ平常の通りに遣つて往けばよい、兎角六ヶ敷悟れなくして仕舞ふぢや、悟は天地間に充滿して、而背表裏はない、皆な平常底だ、六ヶ敷いことはない。

○『大論』八十云、世尊是門、利根菩薩摩訶薩能入、佛言、鈍根菩薩亦可入是門、是門無礙、若菩薩摩訶薩一心學者皆可入是門、○又『圓覺經』云、若遇如來、無上菩提、正修行路、根無大小、皆成佛果、○『辨道話』云、志のありなしによるべし、身の在家出家にかゝはらず、○『不能語』云、若能誠實勤修、則何愚鈍不至、利智若如、信不固、修不精、則何利智得此道、舍利弗

凡夫自界、佗方、西天、東地、等持、佛印、一擅、宗風、惟務、打坐、被礙、兀サワリノナレバコ、ハ死地ニカ、リテヒマガナイ兀地キリニナル

地雖謂萬別、千差、祇管參禪、辨道

普勸坐禪儀提耳錄

大凡坐禪は自土自土とは釋迦の一化土だ、一化土でも三千大千世界だ、三千大千世界と言へば大法螺のやうなれども、西洋の事杯が分つて來て星が一世界といふから事相の上は分つて來たが、理相の上も爾うだらう、曠大無邊に相違ない身でも、眼の世界耳の世界皆な別だ、舌は鋭いが掌は鈍い、事相の上からは、三千大千世界も何でもない、三千万人には三千万の世界あり、四千万人には四千万の世界がある、つまり自界とは釋迦の一化土だ、他方はどこの世界でも、佛のある世界では坐禪せぬ世界はない、佛の印可を受けるが必用だ、今日坐禪して誰の印可を受けた、彼の印可を受けたといふが、其の印可した師家が明眼の宗師なれば好いが、謀判の印可ではサツパリ詰らぬ、實相の印、見性の印、シツカカリした印でなければ駄目だ、小乗では無常の印、無我の印、寂靜の印、之を三法印といふ、世間では人は我慢がなければ可かぬと言ふが、是れは間違ひだ、世間で言ふ我慢は勇氣のことだ、勇氣と我慢と言葉が混雜しては可かぬ、先づ小乗は無常を合點し、無我を合點し、寂靜を合點し、大乘では實相を合點して其の印可を正師に得るぢや、佛法は佛陀の心印を護持せねばならぬ、そこで宗風を擅にし佛風を説き廣げることが出来る、遠慮には及ばぬ、直截根源佛所印ともあるぢや、宗風を擅に

するとは何ぞや、坐禪して兀地に礙へらるゝことだ、被礙兀地、是れは御開山の始められた語だ、禿げ山の兀然として居る如く坐つて居るが、佛祖の坐禪だ、打の字は助語だ、支那の俗語に御飯を炊くを打飯といひ、眠ることを打眠といふ、今も其の如く坐禪を強く利かせるために、打坐といふ、是れは禪語には澤山あるぢや、打給は給金を呉れること、打飯金は雲水に呉れる飯代を出すこと、古歌にも、我事ながら打ちもあかれすとある、何れも助語だ、坐禪を勤めて斯う行つて居るを被礙兀地と謂ふ、被礙とは邪魔になつて向ふが見へぬこと、坐禪になり切つて坐禪に邪魔せられて悟臭くもなく、佛臭くもなく、只だ兀然として坐したまゝを被礙兀地と謂ふ、坐禪は斯ういふもの、あういふものと言ふも向上だの向下だの非思量だの不思議だのと言ふも既に思量分別に涉りて、坐禪の面目ではない、唯だ禿げ頭顱が衝つ立つたやうになつて居る、坐禪にいろ／＼の仕方ありて、萬別千差だ、天台には天台の坐禪あり、眞言には眞言の坐禪あり、二乗の坐禪あり、外道の坐禪あれども、そんな小面倒なことはいらぬ、頓漸秘密杯佛法の建て方あれども、坐禪一方になりて一事を修せざれば一智に長ぜず、只管に參禪辨道するが好い、故に老僧も多く師家を換へなかつた、尤も其の間に四五人の人には接

したが聞く人にも順序あり、教ふる方にも順序があるゆえ、只管に往かねば手に入るものでない。

○自界他方とは是他方の諸佛みな佛智見を開發する、行深般若を宣説したまふなり、直に非思量の法門にて、此土の釋迦と少もちがはぬゆゑに、法華に云く、十方佛土中唯有一乘法、○なほ法華をよく見よ。

○『大般若經』三百二云く、舍利弗我滅度已、後時後分後五百歲甚深般若波羅蜜多、於東北方大作佛事。(此東北方は當日本國と)

○『證道歌』云、直截根源佛所印。

○又云、有人問我解何宗、報道摩訶般若力、是照見五蘊皆空行深般若身心解脫法門也。

○『信心銘』云、十方智者皆入此宗。

○『行持卷』淨祖云、一日一夜不礙蒲團、日夜あらずと。○又『學道用心集』被道礙當處明了、被悟礙當人圓成。

○万別千差、無畏禪要云、衆生根機不同也、大聖設教亦復非一、不可偏執一法、互相是非。

○『開解』云、法門は萬別千差に分るとも、佛祖正傳はたゞこの一門より入るこれ坐禪な

り、ゆへに六祖は一行三昧と稱せらる、中略天童淨祖曰、跏趺坐者乃古佛法也、參禪者心

身脱落也、不要燒香禮拜念佛修懺看經祇管打坐始得。

以下示打坐之用意

自家獅子座牀也

何抛却自家坐牀、謾去來他國之塵境、若錯一步、當面蹉過。

「自覺聖智非思非識ノ坐牀」

「念錯レハ坐牀ヲスベリ落ル」

「跏趺子我父如來ノ獅子座ヲステ、他國ノ塵境ニ去來ス」

「又ハ見色聞聲悟愛六塵ノ他國ニ去來ス」

自分の脚下を捨て、自分の坐して居る床を捨て、長者の子が他國に跏趺して親を

捨てたといふ譬が法華經にあるが、自家を忘れて向ふに取り掛ると他國跏趺の獅子

だ、是れば隨分あるぢや、天台の事、華嚴の事、乃至哲學も食ひ嚙り齒は傷めたが腹は飽

滿せぬといふものが多い、塵境とは六塵の境に對するをいふ、一足錯れば目前でブツ

コロンで僵れるぢや、黃檗は第二念に流至せざれと言ひ、御開山は決定して第一念に

も流至するな、無念にも流至するなと仰せられた、蹉過して蹉くな、自分に求めずして

人に求むると皆な錯りだ、川を渡る時向ふの岸にのみ見て居ると、川の中にて倒れる

が、一步一步に注意すれば倒れることはないとの御示した、天下滔滔皆是だ、商人が寢

ずに儲け算用しても爾う往くものでない、振り返りて見ねばならぬ、是れを回光返照

といふぢや。

○黄檗云、決定不流至第二念、永平祖舉云、決定不流至第一念、不流至無念、と若し流至すれば自家の坐牀をすべり落るなり、蹉過なり。宏智云、妙超初念際と、この意なり。

既得人身之機要、莫虛度光陰、保任佛道之要機、誰浪樂石火、加以形質如草露、運命似電光、倏忽便空、須臾即失。

人間の中でも南閻浮提に生れるは幸福だ、其の上に或は盲となり或は聾となり、困窮過ぎて佛法を聞くことならぬものもあり、福分過ぎて佛法を聞くことならぬものもあり、其の中に入りて佛法を聞くことを得るは結構なことだ、光陰を虚しく度るな、區々として虚しく度るまいと思ふて其れてもなか／＼格別の事は出来ぬ、功能がない、尙更迂潤に暮しては一生所得なくして無駄死にする、其れては折角人間に生れ幸に佛法に値ふた詮がない、生死無常を知り、因果を味さず、戒を持つは佛法の要機だ、佛法で因果を言ふが其れを恐れぬものがあるぢや、戒は佛法の經緯で何宗でも離れるものでない、尾張の黄泉和尚は澤山著述がある、其の中に反爾録が好い、反爾とは爾に出るものは爾に反るといふこととてつまり因果ぢや、其の録中にある事實は佛書から引

用したにあらず、皆な外典から取つて因果は強爲でないことを示された、齊の國に夫婦のものがあつて隣國から攻め込んで来たとき、我子を樹に縛して兄の孤兒を負ふて逃げた、是れ義心はあるが仁心が薄いから、天より子を授からぬ、餘り義烈のところには物が育たぬとある、因果は佛法の專賣ではないが佛道の要機ぢや、保持して味さぬは安心だ、石と火打鎌とカチンとあてるところに火が付く、此の節は早いことは早い、電信が遅いとして電話になつた、病も早いが好いとてベストが流行するな、形質は大五藏の此の身の事だ、此身の無常なることは草の上の露だ、運の好いと言ふ中に身代限り如、電光だ、倏忽便空、夜半に嵐の吹かぬものはだ、須臾即失、昨日一萬圓儲けた、今日は二萬圓取られたといふ鹽梅だな。

○機要機は主發云、機、弓射るもの、弦と筈と喰ひ合て、切てはなたんと眼をつける處を機といふ、古語に、千鈞之弩、不爲驢鼠發、機要本腰也、身最要なり、肝は五臟の初め也、ゆへに諺に肝要と云ふ、今機要と云は坐禪を云ふ、ゆへに宏智も坐禪のとを佛々要機祖々機要と示されしなり、今此の坐禪に値ふは、人間に生て無上菩提の機要を得たるなり、機要は三世諸佛の要機なり。

「先如三謂流通分」
 冀其參學高流久習摸象勿怪真龍精進直指端的之道尊貴絕
「教家ノ名相」
 「正傳ノ三昧具眼ノ全象也」
 「直指人心ノ略語」

證道歌云絶學無爲閑道人佛々菩提ヲ代々幾重ニモ重ルヤウニト嬌爾スレハ合沓スト返ル語ナリ

學無爲之人合沓佛佛之菩提嫡嗣祖祖之三昧久爲恁麼須是

「自證ス」
 「世尊三昧迦葉不知迦葉三昧阿難不知阿難三昧商那和修不知畢竟在彼三昧我亦不知是祖々々三昧ナリ」

恁麼寶藏自開受用如意

「人々屋裡ノ般若藏」
 「又是開祖ノ四恁麼ヲフクンデ示サシ」

參學の人を崇めて高流といふた高流とは氣高い人といふことだ教相扱は摸象だ手
 搜りだ小僧が四教儀や西谷名目を讀むが算砂た象を盲人同士で手搜りて論しても
 論は盡きぬ日蓮宗は三大部は入らぬ題目だけで好いと言ふし禪宗では教相は入ら
 ぬ坐禪て澤山だと言ふそんなものだ卍山様が人間に九穴あり此の九穴を身に持つ
 て往くのて一穴欠けても可かぬと言はれたが各宗のテンデに妄想を唱へるもそん

なものだ真龍が面白い葉公が好んで龍を書いた其れを龍が知つて本體を見せて本
 物の龍を書かせてやらうと空中から出現せしに葉公が驚いて逃げた釋尊が木佛に
 なつて黙つて居らつしやるから好いが若しも現前して此の坊主何を仕て居るとや
 られたらみんな喫驚して逃げるだらう賈龍は皆な珍重するが真龍現前すれば劔を
 按せざるなし眞實の意見は表面には有り難いと言ふが腹の中では怨む賈龍が好い
 直指人心見性成佛直に人心を指す人の誤りを直すには我をも直さねばならぬ直に
 其の物の心を取つ掴まへて端的に指すマッポシに指す什麼物恁麼來と指すそこに
 マッポシに進む石鞏の處に三平が來たら石鞏が弓を引いたすると三平が胸を開い
 て之れに當つたそこで師資契合した聖徳太子も御父帝の譴怒に遭はれた時諸の王
 子は皆な逃げ匿れたが獨り其の責を引いて天に上ること得ず地に潜ること得ずと
 言はれた爾らマッポシに往くが好い何も學ばず何もせぬそれを絶學無爲といふ凡
 夫は貪心が止まぬゆえ彼れが行りたい此れが仕て見たいと一生餓鬼道の日暮しだ
 から絶學無爲の人にはなれぬ無爲安樂の人にはなれぬ只だ無念無作無修無證貪心
 なく求心なき絶學無爲の人を貴べ貴べ己れも其の人になれるからな菩提の二字

は頓證菩提又は爲菩提也杯と塔婆にも書くが是れは具には阿耨多羅三藐三菩提といふて本梵語だ此方には無上正徧智と譯す此の上もない正智慧をいふ佛一切種智のことだ聲聞には聲聞だけ善い種あり菩薩には菩薩の智あり佛の無上の智あり一切の情に達し一切を濟度し一切の迷を去り我といふもの一點もなくなる其れを一切智といふ坐禪するは其の一切智に至るより外はあるまい目的は大に立るが好い佛は一切衆生のために慈悲を以て體とし一切智を以て體とし世界の大神話人になるから一切人も爾う大きく心懸けるが好いといふて其れはなか／＼一世の修業では出來ぬから生れるたびに大きくなつて決定成佛と腹のどん底を極めて偕死ぬことは盡寝すると思ひ休息する立場と思ふて八千返往來するのみならず百萬遍乃至千萬遍も往來する氣になれば安樂なものだ娑婆に執着するから死ぬが厭やになる爾う極めれば何の事はない何でも無上正徧智に合沓するやうにせよ三昧は坐禪ばかりでない境界のこともいふゆえ迦葉の三昧阿難知らず阿難の三昧商那和修知らず我にある三昧我れも亦た知らずと言ふ坐禪して坐禪とも思はず悟つても悟つたとも思はぬから三昧といふ耳に入れば心に残る心になれば行の上にあらはるさす

れは開慧開けて身に修し身に修して覺えがないやうにならねば本當てはない此の如く修行すれば必ず爾うなる是れ雲居道膺様の語だ始に欲得^セ徳^ト廢^ス之^事急務^ニ也^事と使ひ茲て又た二句使ふた寶の藏は法界のこと法界が我が物となるから是れより富貴なことはない生死に心配なく天地と我と同體になり無上正徧智開け佛智見開け生を欣ばず死を畏れず眼は見るのみ口は食ふのみ足は歩むのみ總てに求むることなければ之れより貴いことばない心に求むるところがあるから貧乏だ求心頓息安住不動如須彌山天地に求むることなければ富貴だ御開山は如淨様の國王大臣に近くなといふ御教誨を守りて紫衣を賜はつても却被猿鶴笑紫衣一老翁と言はれた是れ程富貴なことはない成りたい／＼欲しい／＼のある中は貪心で貧乏だ求心頓に息めば寶藏が開いて何を取らうと勝手次第だ松の下は却て涼しくして寐るに好い其れを受け用ゆるに意の如くだ兎角不如意だからあせるが世界が意の如くならぬからとてアセりても意の通りになるものでない凡夫根性だからな佛の無上正徧智なら何時でも如意だ故に佛祖屋裏の般若の智藏が開けると何時でも受用如意だ

○雲居云如入頭頭上了物々上通^ス祇^ト喚^ス了^ス事^ト人終不喚^ス作^ス尊^貴將知^ス尊^貴一路自別^ス

欲得^セ徳^ト廢^ス之^事急務^ニ也^事 尊貴^ト將知^ス尊貴^ト 一路自別^ス 卽是^ス絶學^ス無爲^ス人

○相續三昧則自合菩提之道。

○「信解品」云、如來知見寶藏之分。○大珠慧海云、貧道聞江西和尚道汝自家寶藏一切具足、使用自在、不假外求、我從此一時休去、自己財寶隨身受用、可謂快活。

○「不能語」云、是一編流通之大意、蓋參玄高賢、多虛作偽事之染習、難卒除焉、能用、意宜擇真、直指端的、絕學無爲、共止邪見、妄作之弊則矣。

坐禪儀祖師真筆跋

教外別傳正法眼藏。吾朝未嘗得聞。矧坐禪儀。則無今傳矣。予○

嘉錄中從宋土歸本國。因有參學○○○○不獲已。赴撰之矣。昔

日百丈禪師。建連屋立連牀。能傳少林之風。不同從前葛藤○○○

○學者知之。勿混亂矣。禪苑清規。曾有坐禪儀。雖順百丈之古意。

少添頤師之新條。所以畧有多端之錯。廣有味沒之失。不知言外

之領覽。何人不○今乃拾見聞之真訣。代心表之稟受而已。

○嘉錄考或問普勸坐禪儀尾云嘉錄中從宋土歸本國又辨道話云依行嘉錄頃所撰集之

普勸坐禪儀由此觀之此坐禪儀則歸朝即時之近撰而正傳大法資始之開示也然高祖歸

朝在寶慶三年丁亥窮臘則乃丁日本嘉錄三年也今依改元考案其嘉錄三年丁亥以四月

廿日改元於安貞則其年正二三四之際則可記以嘉錄號而從五月以降到臘月則可記以

安貞也今尙以嘉錄者差誤如何答云朝廷改元其令不速流行則未知改元者用舊號也必

矣或丁兵革烟塵關隘塞塞之時則過元年二年亦有尙未知改元之郡國譬如東鑑廿七卷

記安貞三年己丑十月九日也則未知其正月既改元寬喜也記將軍左右之史官尙未能速

普勸坐禪儀提耳錄終

知改元則其餘可例知矣高祖之用嘉錄之號亦其例也

○「辨道話」にその坐禪の儀則はすぎぬる嘉錄のころ撰集せし普勸坐禪儀に依行すべ

しと見ゆ「建斯記」一七丁嘉錄三年の極月十日改曆安貞元年となる其の冬の中に歸

著故に嘉錄中なり。

道元 坐禪箴提耳錄

坐禪箴

「禪」ヲ治スル故
宏智ノ坐禪箴ヲ慕ハレテ名ヲ假リタ
禪那云三體處又云三思惟修一

此の坐禪箴は御開山が宏智様の坐禪箴を慕はれ其文字を取り替えて宗乘に親しいやうにした宏智様の坐禪箴は文章が立派だ立派のために宗乘が隠れる氣味あり故に御開山が書き直して宗乘に親しくした箴は針なり花なりといふて病を療するもの、是れが此字の本意だ宋朝以後坐禪が漸く衰へて正傳の旨を失ひ變なものになつた釋尊は端坐六年と言ふが釋尊の端坐は僅に六年位のもてない一切經を説かれた時は何時も正身端坐だ法華は無量義處三昧すなはち坐禪の上より説かれた金剛經も冒頭に敷座而坐と述へ其の後に至りて一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出とあるてはないかされば坐禪は特り釋迦牟尼佛の命脈のみに非ず一切諸佛の命脈だ故に諸佛とあるからには必ず坐禪を正傳す此の正傳の坐禪を嫡々相承して震旦初祖達磨大師に到つたされば達磨大師の命脈は係つて坐禪に在る其

の坐禪が佛祖正傳ぢや其の佛祖正傳の坐禪は空劫已前之修證也無拘現成朕兆已前之公案也未待大悟だ公案悟りは晚唐より始つた馬祖や百丈あたりは理智を主として印可された達磨大師も吾れ化縁已に盡さぬ將に印度に歸らんとす各々汝が所解を言へと五人の弟子に印可した師家は行狀を主とし言行一致せねばならぬ言も行も左之右之標榜となる古人皆な爾うぢや是を以て爲人度生した菩薩の自未得度先度他は誓願て戒を持つは聲聞と同じく持たれた其れが大乗より崩れ小乗より偏屈になつてイヤ如來禪だイヤ祖師禪だといふ争ひが晚唐より始つた爾う分けた日には達磨大師は如來禪に付けたものか祖師禪に付けたものか龍樹は七宗の祖師て大智度論は諸宗共に用ふるが其中に祖師禪如來禪といふことはない戒法も坐禪の行はるる所より確乎と持てる梵網經にも定慧力莊嚴萬行爲具足とあるぢや心は無形にして有形の身を支配するそれを心で取れば無形に墮す亦た持戒を誇ると心と行と一致せぬ心行一致身心一如に往かねばならぬ一言半句苟も言はれたものではな

道元禪師坐禪箴提耳錄

い坐禪は公案を考へるためだ悟る機械だといふは弊ぢや其を御開山が大に憂へられた宋朝に坐禪論や坐禪箴があるが皆な坐禪の眞面目でない亂れた禪だ病を生じ

た禪だ其の病を療するため此の箴を作られた御開山に如來禪祖禪往古不傳今
妄傳迷執虛名何百歲可憐末世劣因緣といふ偈がある下劣の因緣で祖師禪や如來禪
が出来て可愛想なりとて其の坐禪病を療するため此の坐禪箴を作られたつまり
此の坐禪箴を以て世間の坐禪病を療治する思召で悟らしいこと公案らしいこと珍
らしい事はないないが天地万物法界を盡してあるぢや坐禪は坐禪を修行するでな
ければ可かぬ多くは坐禪して悟を待ち公案を合點せんとするから悟となり公案とな
つて坐禪とならぬ其の上いさゝかの利益でもあると直に打坐を廢す畢竟坐禪を知ら
ぬからだともに永嘉大師の謗正法輪といふものだ無間の業を招くは此の輩だ坐禪は
そんなものでない初發心にも坐し佛果に至りても猶ほ休止せぬ故に御開山は此行
到佛尙不退者例也所以被佛行也と仰せられた是れてなければならぬ坐禪は佛行だ
故に釋迦牟尼佛は申すに及ばず三世の諸佛は皆な坐禪した坐禪せぬ祖師は歴代の
中一人もない皆な諸佛の如く坐禪した坐禪して坐禪を明め我が境界が少しも坐禪
に背かぬ吾は吾を窮め坐禪は坐禪を極めるそこで天地同根万物一體となるゆゑに
坐禪は貴いぢや佛祖の正傳といふべきぢや只だ悟るだけなればタツないものだ

八字ニテ坐禪ヲ道トシス

佛佛要機祖祖機要

一切諸佛ゆえ佛々といひ一切の祖師ゆえ祖々といふた要機とは玄機のことだ一丁
四方の屋敷も門一丁の門の開け閉ぢはカンヌキ一つにある此のカンヌキを玄機と云
ふぢや其の玄機たるカンヌキは五千餘の經卷五千餘卷の肝要すなはち門を開ける
鍵は坐禪だ資囊の門を推し開き内外玲瓏出入自在なるは此の坐禪のカキガチ一つ
にあるぢや鐵砲もカチンといふ機にて百万の人も打ち殺す五千餘卷のカキガチも
つまりは坐禪にある機要といふも要機といふも字を上下したまでにて深い意味の
あるわけではない十方諸佛の肝心要め歴代諸祖の肝心要めとするは坐禪ぢや是れ
て坐禪は公案のためてなし悟るためてないことが分る坐禪が佛々要機祖々機要だ
から其の上に種々の利益があらはる放捨諸緣休息万事煩惱妄想を離れて坐禪して
見よ煩惱が起る起り通しか悪心が起る起り通しか爾うてない妄本無體物に對して
起るのみ色が目に對するより妄想を起し聲が耳に對するより煩惱を起す耳と目は
鋭いから轉換も早いが肌膚の知覺は鈍い鈍いから煩惱の取れやうが遅い故に觸煩

道元禪師坐禪箴提耳錄

惱は轉じ難い、舌も爾うだ、好きとなれば腹の悪くなるまで食ふ、轉じ難い、其の轉處を得るが坐禪だ、坐禪して坐禪を修行せよ、悟らう悟らうとするから悟れぬ間は坐禪するが、燈の光りても見ると坐禪を止め間斷がある、間斷ある坐禪はほんまではない、ほんまでないから坐禪して居りながら本を讀むやうになる、全體乞食根性だから坐禪程勘定に合はぬものは無い、或る坊主が坐禪しながら紙燃を捻つた何にすると聞いた、汗着作ると言ふた、爾うなるから坐禪が絶ゆるぢや、坐禪するより田を作る方が好くなるから坐禪を止むるぢや、坐禪は天地と一體になる方から考へねばならぬ、坐禪せんとする心が起れば坐禪した人て辛苦を知つた人だ、故に佛々の要機祖々の機要と置かれたは御注意なされたことて、其の機要は外でもない坐禪だ。

○『不能語』曰、機要者、玄機之要妙、要機者、要妙之玄機、只上下乎言耳、以佛與祖而分要機機要動不動其前後、義者則未之有矣。

不思量而現、不回互而成。

身心脱落
不回互、故不思量、不思量、故現成、是佛祖要機現成
本來面目現前又正法自現前ノ現ノ意
六根ノ門々ニ六塵ノ境アリ晝夜回互スルニハニ善惡ノ思城生スルナリ若シ根ハ根ノ位ニ住シ境ハ境ノ位ニ住シテ相涉ラホバ識ノ生スベキ因縁ナシユニニ十八界ハ自然ニ脱落ス脱落ノトキ佛祖ノ要機現成ス

其の坐禪の様子は、何うぢや、不思量而現、不回互而成だ、老僧若い時此の坐禪箴を手寫して所持し、之を以て總べての根本とした、思ひ量らずして現するとは何うぢや、現成の二字を割つて使ふた、現成とは現れて、チャンとしたことだ、山は高くして、チャンとしたが現成で、諸法實相あらはれたまゝ、欠くることなく成就して居るを現成といふぢや、萬事思つて成ると思ふが、凡夫根性で、今御開山は、不思量而現と仰せられた、又た物は、互に回り逢ふて現成して居るを、不回互成すと言ふは、何となく矛盾するやうなれども、篤と考へて見よ、全體思量して成るに、不思量と言ふは總べてが思量を離れて居るからだ、思ふた通りと言ふが、天地の法と理と合したので、天地の理に稱ふやうに、天地の法に副ふやうに思ふたので、思ひが爲したので、天地の理が爲し、天地の法が爲した、故に思はずして成つたのだ、道理と思と合體するは、其は賢人だ、思量分別の人が、思量の下知を受けて、其の命令の通りになるものではない、老僧は思つたことに成就せぬことはない、其の代り出来るやうのもののみ思ふぢや、一切の諸法は、思量に與らずして現成して居る、思量して現成したものでない、春は暖いて好いと思ふが、殊の外寒い春寒料峭だ、夏は暑いと極つて居るやうなれども、時々雹が降つて驟に冷

氣を感ずることがある、皆不思議底の現成ぢや、思量を超越して居る、されば坐禪して法を法に任せたととき決して我が身に苦はない、人法二空とは是れだ、我が身を天地の大道に任せ佛法に任せたととき、佛々、要機祖々、機要坐禪の面目現成す、其の時身心脱落、思量非思量と現成す、眼あり色あり相互に廻り合ふて妄想が起る、元來眼にも色にも妄想はない、相互に廻り合ふところに妄想が起る、之を回互といふ、不回互而成とは鼻は鼻の範圍を守り眼は花を好いと見るのみ、さするときは花は花の位を全ふし、眼は眼の位を全ふし、六根が六境に對して染汚せぬ、之れを不回互といふ、日本は日本を治めて他國の政治に干與せず、各國其の通りなれば、不回互にして我が區域を出てず犯さぬとき自ら眞の交際が出来、不回互の道理が現成する、耳が溺れざれば耳の分際を全ふす、之を不回互といふ、耳は聲を聞くのみ、好い聲だ、今一曲聴きたいと思へば耳の位をすべつて、向ふに往くから位を守らぬ、不回互とは其の位を守りて居ることだ、六根は此方にあり、六塵は向ふにある、其れに對して位を犯さぬ、彼れを欲しいと言へば向の位を奪ふから向ふの位を犯し、此方も犯す、目は色を見ても溺れず、位置にも執着せぬから坐禪の功德が現成す、位置を守るときは位置にありながら位置を離る、

道理がある、そこを公案現成して脱落の消息あらはる、といふぢや、故に主人が主人の位置を守る時は主人の位置を忘る、から我を守る、我を守るとき我を離る、坐禪するとき坐禪を離る、主人が主人の位置を守りながら其處を離る、から脱落といふ、其を不回互而成といふ、相互にめぐり合ふてアチを助け、コチを助けるといふことなくして本來の面目現成す、之を不回互而成といふ、ぢや、正法自現前も茲のことだ、茲で不思議、而現不回互而成を考へて見よ、然るときは眼は色を脱落する時、妄想煩惱を脱落する、守るとも思はずなから、小山田のいたつらならぬ、案山子なりけり、思はぬけれども弓でも張つてぼつ立つて居るとき、鷲や鹿が畏る、坐禪も爾うだ、故に坐禪して居る圖を掛ければ、魔王も怖る、ぢや、誰れが怖る、が、其れは分別妄想知解あるものが恐る、ぢや、此方に恐る、ところあるゆえ恐る、のぢや、老僧も若い時に氣が付いて食ひかぢりの學問せず、只管に打坐したならば、もつと御開山も喜ばしやるものになつたであらうが、今になつて残念だ、昔の豪傑と言はる、人は皆な萬事を抛ちて只管坐禪せられた、大梅の法常禪師は山に引つ籠つた、此の境界を得たから、石鞞は弓を引く、牛頭の法融は虎が來て左右に事へた、面山様の叔父坊主が肥後の或る山中

に居睡りをして居たら狼が鼻紙くわへて来て呉れたといふことだ、身心脱落、脱落身心、決して微塵も面前の境に動されなければ虎狼も畏服するだらうよ、此の八字が全篇を貫くぢや。

○四威儀、中坐者安樂、故佛々法爾有結跏趺坐見大論、然至回光返照之功夫、豈拘坐臥哉。

○『坐禪用心記』云、不思議而現威儀、時見成即公案、不回互而成修證、時公案即見成、朕兆已前之消息、空劫那畔之因緣、佛々祖々靈機樞要、唯此一事也。○面師云、辨道話に、修せざるにはあらはれずとあるを、反して修すればあらはるゝなり、不思議は修ゆへにあらはるゝを、不思議而現と云ふ。○現成の字を分て用ゆるのみ、不思議も不回互も、ともに現成公案也。

不思議而現其現自親、不回互而成其成自證。

不思議にして現成するから其の現成が親密だ、今日の知己はアテにならぬ、頼に知己になるから頼知己だ、金を借りに往けば仲悪るになるから、變知己だ、そんなものは可かぬ、是れは分別思量から來たゆゑぢや、ところが不思議より來たことなれば眞の親

密だ、今日の親密は大抵溺るゝことがあるな、分別妄想あるゆゑ親とは言はれぬ、坐禪は傍觀より針ほどの隙き間もない、分別妄想を離れて居るから、な春が來れば花が咲く、花は乞食の庭でも神の苑でも遅速はない、分別から來たものでないからだ。○眼は眼、色は色、耳は耳、聲は聲と位置を守りて居るところに法が現成する、其の現成や、其の證、證は自證で自分の心の證明が自分で出来る、人なら他から信用する自分の心の證明、自分て出來ぬならたとひ他の證明をたどても役に立たぬ、此の證明は自證で他の證明を借るてない、證契とは水と水と合し、火と火と合したる如くなるをいふのぢや。

○親親密也、唯是自而已、非傍觀之所及也。

○證證會也、唯是自證而已、非傍觀之所測也。

其現自親、曾無染汚、其成自證、曾無正偏。

其の現成が親しと言へば染汚だ、夫婦が親しいといへば染汚だ、況や外のもの、親しさをや、彼れと親しい此れと親しいと言ふは分別思量から往くから、みんな染汚だ、思

量分別なれば必ず染汚する、思量分別を離れたものなれば眞箇親しいから染汚はな
い、坐禪は妄想を離れ煩惱を離れ名利を離れて居るから、其の現成が一點の染汚もな
い、會無染汚。○其の成は不回互而成する證なれば、正なく偏なし、正偏とは正位偏位の
ことだ、君を正位とし臣を偏位とす、偏は片寄る義にて臣に片寄る、海軍大臣といへば
海軍に片寄り内務大臣といへば内務に片寄る、君は萬法に獨立してどこにも片寄ら
ぬ故に對待はない、並ぶものはない、偏位は對待の法ゆえ並ぶ物がある、君臣和合すれ
ば回互、君は君の位を守れば不回互、臣は臣の位を守れば不回互、君が君の位を守ると
別に君が法界即ち日本になつて居るから、茲が君の位といふことはない、放佚なく驕
慢なきとき君といふものなきゆゑ正位偏位がなくなるぢや、大臣が私欲名聞を離れ
て功勳に誇らず、爵位を望まず、只だ其の位を守るときは正位も偏位もない、臣下が其
の位を守りて迷悟名利の念なく、其の職を守れば其職を脱落して居る、君が回互せず
して其の位を守るときは君徳天下に充ち、臣が臣下の位を守れば其の功勳が天下に
滿つ、之を不回互而成といふ、故に君位臣位正位偏位はない、眼は眼の位を守るとき眼
の位を脱落し、人我を極度まで窮めるときは人我がなくなる、なくして我れを守る之

れを其成自證會無正偏といふぢや。
○無染汚は、非思量の境界の文彩にあらはれたを云ふ。
○無正偏といふは回互すればこそ正偏あり、不回互なれば本より正偏の兩頭はみえ
ぬなり。

曾無染汚之親。其親無委而脫落。

「染汚ナケレハ親密モ自然ニ脱落シテ守住スベキ親密ノ跡ハナシ
親密モ守レバ疾ナリ」

委は頓なりといふて、クヅレルこと、ヤブレルことだ、其の親みがやぶれるとき自ら脱
落して我見人見なく、貪瞋痴慢の起りやうがない、自ら脱落して居る、水晶の壺に水を
入れた如く、内外玲瓏だ、其の如く坐禪するところ、煩惱妄想のみならず、坐禪までが
摧き破られて坐禪したなりに一切の凡夫界を脱落して、丈六の身を現成し、金繩銀鎖
に縛せられない、此の人なれば脱然として居る、眼耳鼻舌身意其の儘に脱落して居る、
故に坐禪したなり生死を離れ、打坐したなり佛體を現成して佛ぢや、其の脱落の性不

染汚の性現するるときを直指人心見性成佛といふ、微塵も佛祖に恥づることはない故に坐禪せば坐禪になるが好い、悟や公案を求むれば坐禪とはならぬ。
○『不能語』無委而脱落、委曲之圖度之者、坐禪之魔事也。

曾無正偏之證、其證無圖而功夫。

正偏ノ兩頭根塵ノ人境ガナケレバ證會ニ造作ハ微塵モキザ、ヌケリ
アイ手ナシ一行三昧
無圖ヲ盡未來際ニカケテ利那那ニ精進スルヲ功夫ト云

其の正もなく偏もなければ無圖而功夫、理は廣狹大小を言ふことを得ず、眼にも見えぬ之を正位といひ、森羅萬象とあらはれた方を偏位といふ、鎌倉が麥畑となれば江戸が東京となつて去所もなく來所もなきを正位といふ、正位は無物の境界ぢや、正位は見ることもならず、逐ひ掛けることもならぬ、理は名を付けて研究するのみて品物を見ることならず、之を正位といふ、つまり脱然として見れば正位を慕ふこともなく、偏位を執することもなく、見たもの聞いたものを執着することはない、其れを無正偏之證といふ、譬へば父子兄弟ありても正位の上から言へば誰が先きに死ぬか誰が後に死ぬか分らぬ、今日の法律あり政治あり人倫あるを偏位といふ、偏位は正位に歸す、若

し偏位の形のみありて正位の形跡もなきときは人の骨にて富士山が三つも四つも作れるであらう、生じては滅し、滅しては生じ、どん／＼正位に往くから執着が取れる、死して極樂へ行たといふは體の好い妄想だ、坐禪にはならぬ、正位を本源として論ずれば斷見となり、偏位に執着すれば常見となる、正位は正位にありて正位を究め、偏位は偏位にありて偏位を究む、其れを無圖而功夫といふ、茲て坐禪が必要だ、思量簡不思量底之れが坐禪だ、何も圖ることない相手にするものがないから眼があればとも眼があり潰れ、鼻があればとも鼻があり潰れた、女島のもものは男を戀ふことはない、圖ることなきを功夫するが坐禪だ、思量不思量底が坐禪だ、二祖が我れ已に諸縁を息むと言はれたとき、初祖が斷滅と成り去ることなしやと言ふたら、二祖が了々常知と答へられた、是れ何することはない、眼は色を見て溺れず、舌は味に溺れず、心は物を分別すれども心に使はれず、之が無圖で其れを功夫するが坐禪だ、心は生涯の器械で好い小使だ、善は善惡は惡、是は是非は非、其れを分別する器械だ、其れに使はれるは小使に使はれるやうなものだ、其の奴隸にならぬを無圖而功夫といふ。

○無圖而功夫 全體運用之而已此句的當スル故ニ出之

○『要解』六ノ三 所謂行境者、無復簡顯、無復情解、唯全體運用之而已。

水清徹地兮魚行似魚、空濶透天兮鳥飛如鳥。

水魚空鳥知皆根塵一如而無礙ナリ

水清徹地兮魚行似魚は、身心脱落の境界だ、六根が六塵に奪はれぬ境界だ、面山様は「古
人未發の珍言末代に難聞希聞の說法なり金剛の三句よりも親しい」と言はれたぢや
親鸞上人が箱根で御開山に遇はれ、坐禪のことを問はれたといふことだが、此の坐禪
箴のことだらう、悟とか空とか言へば鳥の空に引つ掛り、魚の水に引つ掛つたやうな
ものだと言はれたが、其れを聞かれて上人が自由を得た、そこで御開山が上人に拂子
を授けられたといふことぢや。○水魚と空鳥、六根と六塵、知と境、學問も國土も境だ、國
土にありて國土に觸れず、時に逢ふて時に觸れず、魚の水を行く如く、鳥の空を行く如
くなるが、坐禪の妙處だ、繫縛あるものは引つ掛り通しだ、此の水魚と空鳥とは坐禪の
解脱の様子を喩へた前は、理で茲は、面前の境を以て喩へられた。○魚行似魚とは何だ、

似魚といへば魚にあらず、魚行と言へば魚だ、さすれば魚にして魚を解脱す、人行似人
と言ふても、好い、全體人は何處より來て來處に往く、字の講釋は入らぬ、人は人に似た
やうなものだ、屹度人は何物と究めて見よ、五常の道を守れば人間、守らざれば畜生、人
間に似た畜生、全體人の極度まで究むれば、何を以て種とするか、山も崩れば海となり
海が變じて田となる、故に一切の物は無自性で、實體はない、無明實性即佛性、一念省み
るところに變つたものになるから、無明に自性はない、人が無明から來た人間だ、無明
が根源だ、無明を自性とするから、人間の自性はない、魚に魚の自性はない、魚とい
ふ名を付けて通用して居るから、魚といふが、魚に畢竟自性はない、水戸ではカレイ
とヒラメと別だが、ヒラメと人間が名を付けカレイと人間が名を付けたので、魚が自
身て我はヒラメなりカレイと名乗つて出た譯ではない、假りの名だ、自性はない、鯨に
向つて貴様は鯨に相違ないかと言ふたところ、鯨に分るものでない、只だ一切諸相
は解脱の相だ、魚と言ふから魚だ、似魚だから魚を解脱して居る、子供子供に似たもの、
美人美人に似たもの、金持ち金持ちに似たもの、是れて身心脱落、脱落身心、一切の妄想
を離れ、一切の煩惱を離れ、假名を離れて、脱然と坐する境界、之れより現成す。○下の句

も全じだ○金剛の三句とは衆生非衆生、是名衆生、佛非佛、是名佛、其れは其れにあらざるものを其れと使ふて居るのだ、高く眼を着けて見れば父子父子を離る、之を父子となす、おれは親だ、親と言へば喧嘩が絶えぬ、非父子といふて圭角を取り、父子を解脱し、繫縛を離れて、其の物を成就す、之が坐禪の妙處だ、穆山、非穆山、是名穆山、是れて脱然たる面目現成し、正法現成す、之を不思議而現、不回互而成といふぢや。

○魚行似魚、鳥飛如鳥、喻而非喻、法而非法、宏智、杳杳遲遲、唯比喻語也、無舌人解語、而實非思量境界、佛祖要機也、百丈所謂金剛三句、衆生即非衆生、是名衆生、鳥飛杳杳、初句衆生也、若云鳥飛非鳥、次、即非衆生也、若云鳥飛名鳥、後、是名衆生也、今高祖語、超越三句、鳥如鳥、故非鳥、非鳥、實非思量境界、魚鳥上露、現此道理、係諸佛衆生及萬法之上、能親參熟、則不回互、上直不思量、而佛佛要機、祖祖機要、塵々法々、上現成也、實難思議之祖訓也、一日百千命根、供艱盡未來際、值遇頂戴。

道元坐禪箴提耳錄終

附錄

古佛坐禪箴提耳錄

佛佛要機。祖祖機要。不觸事而知。不對緣而照。

「要ハ體云レ證
機云レ修下ニ機要ノ二字ヲ引ノベテ知トイヒ照トイフ
鏡ニウツルヲ取ル凡夫
印紙同時時前後端坐ノ時八萬法藏一時歷然
下ノ知ト照ト云ハ此八字ヲ引ノベテ説ク故ニ
端坐ノトキミナ具ル
鏡ノ物ニ對スルモ物ニ對セヌトキモ共ニ慮知ナキハ此ニ云フ知照也

知と照とは燈と光との如し、知照の二字を法華には佛知見と云ふ、金剛經には如是知、如是見とある、見は照の義になるゆえに照見とつゞき、知は散亂に涉らぬ義、照は昏沈に墮せぬ義、知を知つから知照を照つから照なり、これ回光返照なり、相手をとつてむかひをてらすにあらず、如珠發光、光還自照と云ふ道理と同じ、人々具足般若光明遍照と云ふなり、眞歇和尚は、常光現前、念々不昧と云ひ、二祖は了々常知と云ひ、信心銘、虛明自照、不勞心力と云ひ、永祖は、打坐正法、眼藏涅槃妙心と看話禪と不同、可知○大乘經論、祖師の教示、皆この處に引導せらるゝ手段なり、これが三世諸佛歷代祖師の要機々要

にて直指人心見性成佛とあるはこの旨なり。○不觸不對の知照法華云、餘人所不見唯
獨自明了の境界、行燈が行燈を照すがごとし。

○不觸事而知、知は覺知にあらざ、覺知は少量なり、了知の知にあらざ、了知は造作なり
かるがゆへに知は不觸事なり、不觸事は知なり、遍知と度量すべからず、自知と局量す
べからず、その不觸事といふは明頭來明頭打、暗頭來暗頭打なり、坐破、蟻生皮なり。○不
對緣而照、この照は照了の照にあらざ、靈照にあらざ、不對緣を照とす、照の緣と化せざ
るあり、緣これ照なるがゆへに、不對といふは遍界不會藏なり、破界不出頭なり、微なり
妙なり。(向ふの緣は此方の般若の照なり、目前無法の意) 回互不回互なり。○照了は外
に流るゝ病あり、靈照は内に沈む病あり、徧界不會藏は本と無いものが藏すやうがな
い、破界不出頭は不會藏の裏なり、十界を破て一切のものが頭を出さず、觀照と云は寂
照と云ふ事理の二法を立て云ふ、みな難取。

不觸事而知。其知自微。不對緣而照。其照自妙。其知自微。曾無分

「自然義」
「微ハ非斷非空」

「妙ハ名不可思議、應知不及」

「唯知ノ
相應ス」

別之思。其照自妙。曾無毫忽之兆。曾無分別之思。其知無偶而奇

「其ノ照ノ妙ハ」

「知ハカリニ
テ相手ナシ」

「教陽ハ」

曾無毫忽之兆。其照無取而了。水清徹底兮。魚行遲遲。空濶莫涯

「照ハカリニテ對ニナル緣ナキ
ニエニ向フニトルベキモノナリ」

「魚ノ水ニ不觸ヲ以テ不觸事而
知ニ譬フ向フニモ遊戯無碍」

「鳥ノ空ニ不礙ヲ
以テ不對緣而照ニ譬フ向フニモ遊戯無碍」

兮鳥飛杳杳

○『開解』自は所從來也と注して、ありきたるを云ふ辭なり、自微自妙と云は、ありきたる
とをりの微なり、妙なりにて、新ら敷出來たることにあらざと云ほどのことゝなるなり
○諸佛の中にも衆生の中にも惣して善惡邪正順逆縱橫上下大小の一切萬法の上に
涯りをみずきはをしらぬこと、鳥の空と魚の水との如くなれば、衲僧行履畢了す、これ
を祖門に絶言絶慮の田地と云ふ、佛經には不可思議不可稱量と説かれたり、此の境界
に安住するを佛佛要機、祖祖機要、三昧王三昧の非思量とは云なり、金剛經云、我若具説
者、或有人聞心即狂、亂狐疑不信、須菩提當知是經不可思議、果報亦不可思議と、これ則ち

金剛三昧の觀照の功徳を説れたり、この般若觀照はこれ正傳の坐禪なり。

古宏智坐禪箴提耳錄終

明治四十四年三月十一日印刷
明治四十四年三月十五日發行

普勸坐禪儀提耳錄與附
定價金參拾錢

編輯人 岸澤惟安

東京市芝區露月町十八番地

發行兼印刷人 今村延雄

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

不許複製

發行所

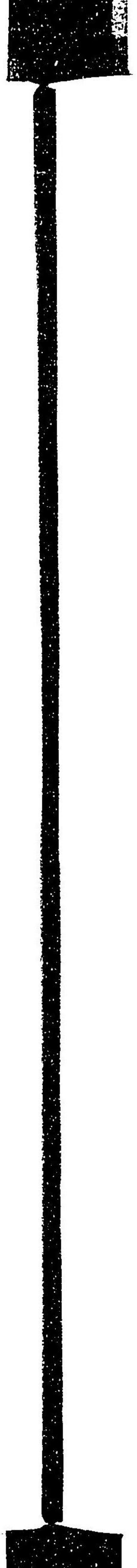
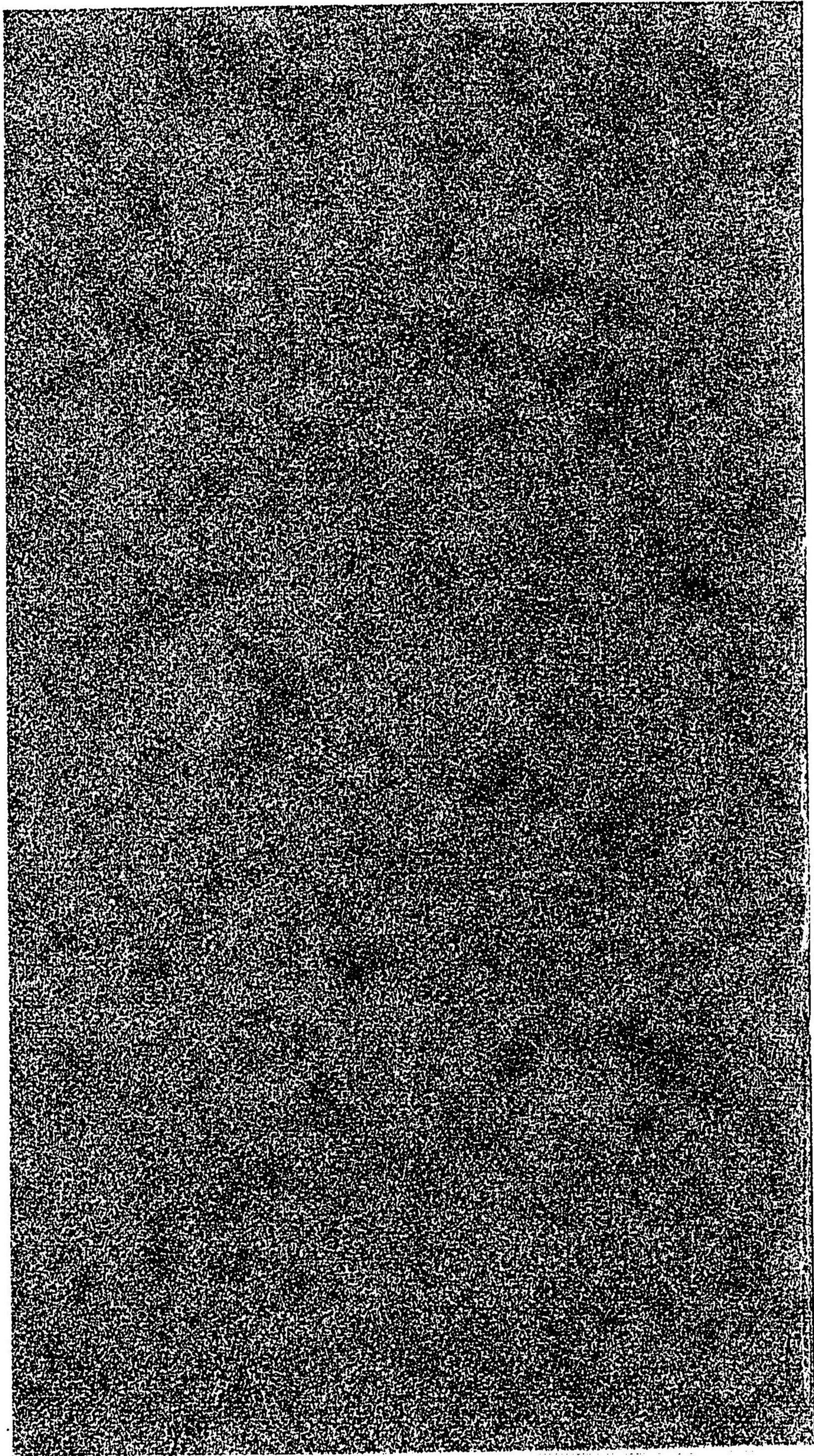
東京市芝區露月町十八番地

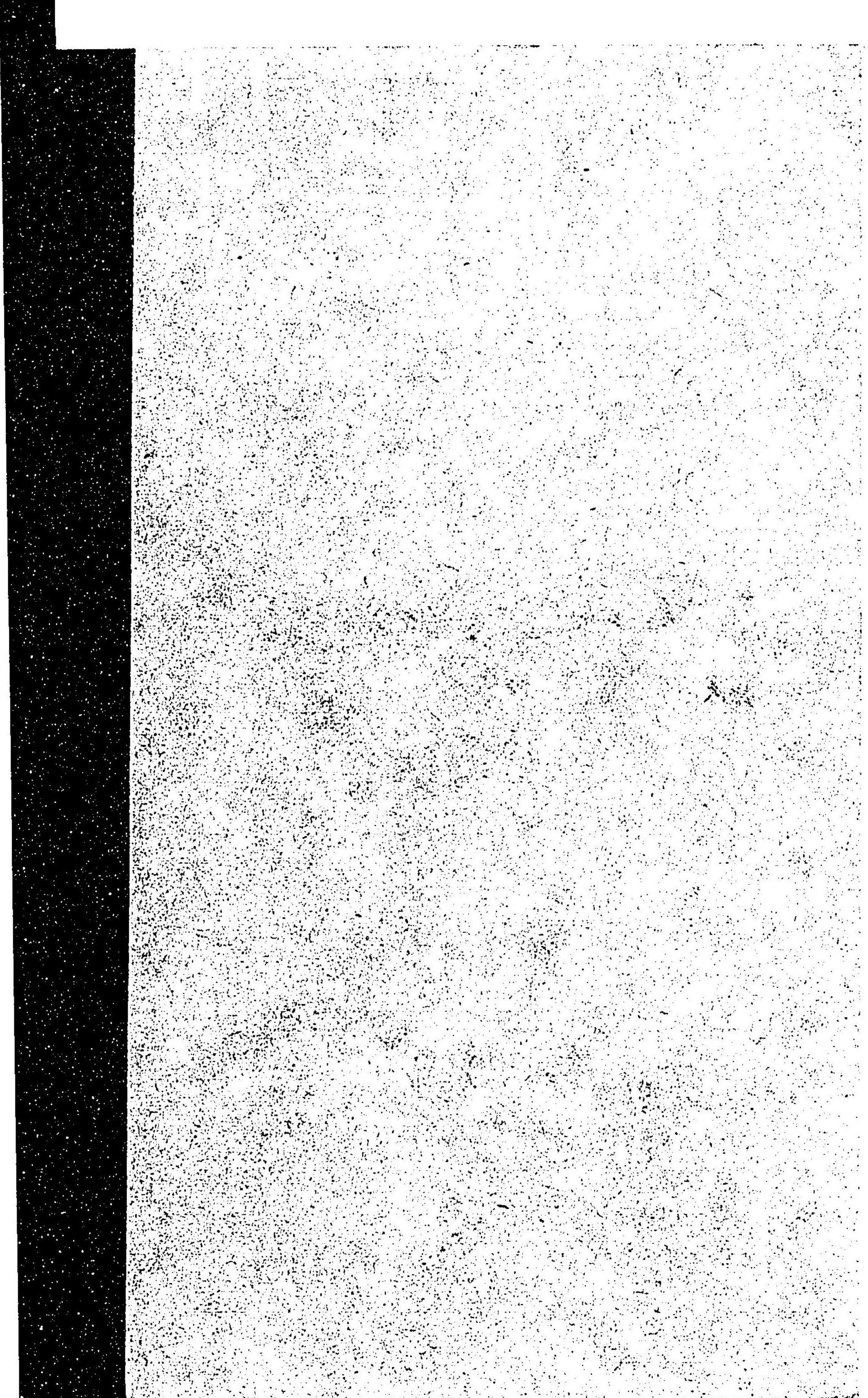
鴻盟社

振替口座東京九七九
電話芝區千廿七

324
228

I-6P73





324

228

普
勸 坐禪儀提耳録

国立国会図書館

019808-000-4

324-228

普勸坐禪儀提耳録

西有 瑾英/述

M44.3

ABG-0630



